





## 末日聖徒イエス・キリスト教会

### 大管長会

スベンサー・W・キンボール  
N・エルドン・タナー  
マリオン・G・ロムニー

### 十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン  
マーク・E・ピーターセン  
デルバート・L・ステイブレー  
リグランド・リチャーズ  
ハワード・W・ハンター  
ゴードン・B・ヒンクレー  
トーマス・S・モンソン  
ボイド・K・バックナー  
マービン・J・アシュトン  
ブルース・R・マッコンキー  
L・トム・ペリー  
デビッド・B・ヘイト

### 顧問

マリオン・D・ハンクス  
ロバート・D・ヘイルズ  
ディーン・L・ラーセン  
リチャード・G・スコット

### 教会誌編集主幹

ディーン・L・ラーセン

### 国際機関誌

ラリー・ヒラー (編集主幹)  
キャロル・ラーセン (編集副主幹)  
ロジャー・ギリング (デザイナー)

### 「聖徒の道」

八木沼 修一 (翻訳部長)

## も く じ

理想的な末日聖徒の家庭	マリオン・G・ロムニー	1
質疑応答		4
信頼は証の鍵	アネット・パーキンソン	9
模範による伝道		12
エリザベス・フランシス・ イエーツ		14
ローカル・ニュース		17
家族の祈り	ルシル・C・リーディング	22
少年ジョセフ	マージェリー・S・キャノン ルーレン・G・ウィルキンソン	25
桃ではなくて人をつくる	エズラ・タフト・ベンソン	31
モルモン経に登場する民の 文字体系	ジョン・L・ソレンセン	34
父は先輩宣教師	エロイズ・ベル	38
克己	ボーン・J・フェザーストーン	45

### 表紙の説明

カール・クリスチャン・アントン・クリステンセン画。1846年2月半ば、永結したミシシッピ川を渡り、アイオワ州シユガーシティーに向かう聖徒たち。

### 聖徒の道 9月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会  
東京都港区南麻布5-10-30  
印刷所 株式会社 精興社  
配 送 東京ディストリビューション・センター  
東京都世田谷区上用賀4-9-19  
定 価 年間予約1,700円 1部150円  
海外予約1,700円

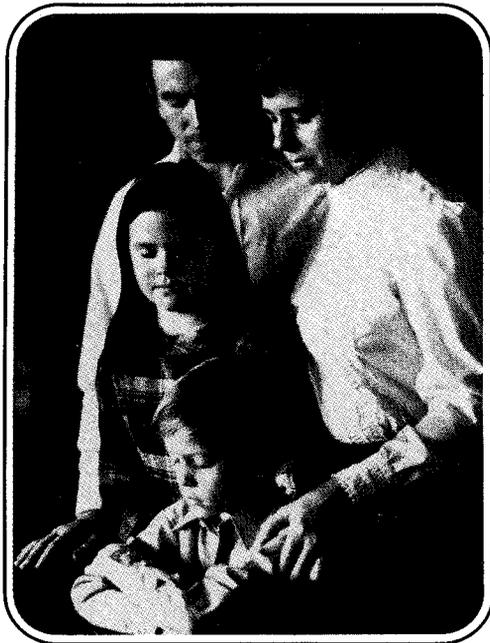
INTERNATIONAL MAGAZINE PBMA 053 AJA Printed in Japan

郵便振替口座番号 東京0-41512  
口座名 末日聖徒イエス・キリスト教会  
東京ディストリビューション・センター

大管長会メッセージ

# 理想的な 末日聖徒の家庭

大管長会第二副管長  
マリオン・G・ロムニー



**理** 想的な末日聖徒の家庭とは、神権の権威によって結び固められた両親により管理される家庭である。また子供が誓約の子でない場合は、その両親に結び固められている。

この家庭は什分の一を納めて築かれている。すなわち、家族全員が収入の什分の一を納めている。

本当の末日聖徒の家庭では、毎日が家族の祈りと個人の祈りで始まり、また終わっている。

イエス・キリストの福音が、言葉と模範によって教えられ、生活に取り入れられている。この家庭では、神権が尊ばれている。

本当の末日聖徒の家庭では、家族が互いに誠実である。互いに愛し、敬い、助け合っている。

末日聖徒は結婚について特別な考えを持っている。結婚はこの世の家族の始まりである。これについては、一般の人々の考えも同じである。しかし末日聖徒はさらに、結婚はまた永遠の家族の始まりであると考えている。夫婦が聖なる神権により、また約束の聖きみたまにより結び固められるならば、ふたりの結合は永遠に続く、そして子供たちは永遠にそのふたりの子供になるというのが、末日聖徒の考えである。この希望と期待を、末日聖徒は神から与えられた概念として抱いているのである。

この概念は、これから結婚しようとする末日聖徒の男女に、清く汚れない生活を送りたいという気持ちを起こさせる。デビッド・O・マッケイ大管長はよく次のように語った。「神



殿で結婚できるということは、ふたりがふさわしい生活を送ってきたというしるしである。したがって、神殿に参入できる資格を得ることが大切であり、これはコートシップと婚約期間中の生活によって判断される。……幸福な結婚生活の基はコートシップにあり、結婚式に始まるものではない。神殿において素晴らしい結婚をするためには、清い生活を送ることが必要である。」(1959年6月25日、神殿集會)

まだ結び固めを受けていない夫婦は、神殿で結び固めを受けることを目標にすべきである。そのためには、福音の標準に添って生活し、自らを資格ある者とするのである。その準備をする時に主の導きを求め、とにかく努力して、神殿に参入し、結び固めを受けるようにしていただきたい。

ブリガム・ヤング大管長は、かつて次のように語った。

「教会の若い男性は、自分のおかれている状態をよく理解するならば、たとえ英国まで旅をしなくても、正しい方法で結婚するために必ず喜んで出かけて行くことだろう。また、福音を愛し、その祝福にあずかりたいと望む教会の若い女性は、ほかの方法では結婚しないことだろう。」(*Journal of Discourses* 「説教集」11:118)

前にも述べたように、末日聖徒の家庭は什分の一を納めて築かれた家庭である。什分の一について、ブリガム・ヤング大管長は次のように語っている。

「主は什分の一の律法を定められ、アダム、エノク、アブラハムの時代にこれは守られた。……私は末日聖徒と自称する方々にこのことをはっきりと申し上げたい。什分の一と捧げ物を無視する人々は、やがて主の懲らしめを受けるであろう。最も大切なこの戒めをなおざりにする人々がいる。しかし、什分の一と捧げ物を納めるのを怠る人々は、他の事柄も怠るようになる。そしてそうする内に、福音の精神もまったく失ってしまい、暗黒の中に踏み込んで、自分がどこへ行こうとしている

のかがわからなくなってしまうことだろう。」(「説教集」15:163)

本当の末日聖徒の家庭はすべて、祈りの家庭である。主はアダムとイブをエデンの園より追い出した後、彼らに「主なる汝らの神を礼拝」せよという戒めを与えられた(モーセ5:5)。これは現在の記録にある限り、彼らが園を出た後、初めて与えられた戒めである。その時から現在まで、この戒めは他のいかなる戒めにも増してひんばんに繰り返されている。この戒めに従うことを怠る教会員の家族や個人は、危険を自らの身に招いているのである。

主は言われた。「勝利者たらんことを常に祈るべし。誠にサタンに打ち勝つ様に祈れ、また現にサタンの仕事に力を与えるサタンの僕らの手より免れんことを祈るべし。」(教義と聖約10:5)

「われまた彼らに一つの誠命を与う。およそ、祈るべき時にわが前に祈りをなすことを守らざる者は、わが民を審く者の前に覚えらるべし。」(教義と聖約68:33)

ジョセフ・F・スミス大管長は次のように言っている。

「神の王国、正義、進歩、発展、神の王国における永遠の生命と永遠の増加の基は、神が定められた家庭にある。家族が純潔、真実の愛、正義公平の原則の上に築かれるならば、家庭に最も崇高な敬虔さと気高い思いをもたらすことは決してむずかしくない。互いに全幅の信頼を寄せ、神の律法を守って生活し、この世における使命を果たそうと決心している夫婦は、家庭なしに満足しないであろうし、また満足するはずがない。彼らの心、考え、思い、望みはおのずから、家庭と家族と自らの王国の建設に、また永遠の増加と力、栄光、昇栄、支配、終わりのない世界の基を据えることに向けられるであろう。」(「福音の教義」第2巻、p.39)

天国は、理想的な末日聖徒の家庭の延長に過ぎないのである。

# 質 疑 応 答

本誌の回答は問題解決の一助として与えられたものであり、  
教会の教義を公式に宣言するものではありません。



七十人第一定員会会長  
フランクリン・D・リチャーズ

神権の祝福はどの位の頻度で求めてよい  
ものでしょうか。体の具合が悪い時や、  
精神的に不安定な時、また自信のない時  
に、いつでも受けてよいのでしょうか。

この質問に対する回答は、「メルケゼデク神  
権手引き」の以下の記述に網羅されていると  
思います。

「特別な場合に、監督、父親（家族のため  
に）、その他のメルケゼデク神権者は、自らあ  
るいは依頼を受けた時に、状況に応じた慰め  
と助言を特別な祝福として与えることができ  
る。この種の祝福を与える状況には、次のよ  
うな場合が考えられる。

緊張や試練の時、すなわち知的、情緒的、  
肉体的に困難の生じている時。例えば、家族  
の者が亡くなった時や、入院して手術を受け  
なければならない時。

病気の場合には、病人の癒しの儀式の一部  
として祝福を授けることができる。それをさ  
らに、慰めの祝福とすることもできる。

特別な神権の祝福なしに直面している問題  
を解決する必要がある時もある。それぞれの  
場合にどうすべきかを規定するはっきりした  
規則を作ることはできない。従って、いつも  
主からの靈感が必要である。」(p. 25)

また、あなたのホームティーチャー、定員  
会指導者、監督は、それぞれの状況に応じた  
助言を与えることができるということも、こ  
こで申し添えておきたいと思います。



ブリガム・ヤング大学  
古代聖典学部  
エルディン・リックス

黙示録22章18節の言葉を、私たちはどの  
ように理解すればよいでしょうか。

私たちが「モルモン経」、「教義と聖約」、  
「高価なる真珠」を聖典とみなしていること  
を考えると、あなたの質問はまことに当を得  
ています。これについて論じる前に、まず同  
章の18、19節を見てみましょう。

「この書の預言の言葉を聞くすべての人々  
に対して、わたしは警告する。もしこれに書

き加える者があれば、神はその人に、この書に書かれている災害を加えられる。

また、もしこの預言の書の言葉をとり除く者があれば、神はその人の受くべき分を、この書に書かれているいのちの木と聖なる都から、とり除かれる。」

そこで初めに、ヨハネの言う「この書」とは何を指すのかを考え、次いでこれに加えてはならないし、これから取り除いてもならないとはどういう意味かを考えてみましょう。ヨハネが黙示録を書いたのは、紀元1世紀の後半です。当時はまだ新約聖書はありませんでした。ということは、ヨハネは新約聖書の結びの言葉としてこれを書いたのではないということです。

ヨハネはパトモス島に流刑にされた時、そこで、今日のトルコの西部地方に当時あった教会の7つの支部あてに、ひとつの巻き物を書きました。この記録は、現在新約聖書として知られている選集を構成する他の26の書とは全く独立したものでした。つまり、ヨハネは結びの書としてこれを書いたわけではないのです。これら26の書の内幾つかは黙示録よりも後に書かれたということで、学者の意見は一致しています。これらの神聖な書き物が集められて、今日私たちが手にしているような新約聖書となったのは、紀元4世紀のことでした。これらの事実を考える時に、ヨハネの言う「この書」とは、当時まだ編纂されていなかった新約聖書ではなく、ヨハネ自身の書いた黙示録を指すことがわかります。

次に、ヨハネはこの書を読む人に、これに言葉を加えてはならないし、これから言葉を取り除いてもならないと言っていますが、これは、だれも決してヨハネのこの書の内容を

変更してはならないということです。ヨハネは、写字生や偽り者、善意から誤り導く信者、その他いかなる人もこの書に手を加えないようにと願っています。主の靈感を受けて記したままにそれが保たれることを、ヨハネは望んでいるのです。旧約聖書の第4の書である申命記の著者が、「わたしがあなたがたに命じる言葉に付け加えてはならない。また減らしてはならない」(申命4:2。12:32をも参照)と、同じような警告を発していることは興味深いことです。いずれの著者も、将来これらの記録を読む人々に、書かれている事柄を変更しないようにと命じています。幸いにも、申命記のこの言葉を盾にとって、これ以上聖典はないはずだと主張する人は全くいないようです。というのは、そのように主張すれば、聖書のそれ以後の箇所は受け入れられないということになるからです。

ヨハネは、これ以外に聖典はないとは言っていません。むしろ黙示録を読むと、ヨハネは末日に確かにほかの聖典が出ると考えていたと結論せざるを得ないのです。どうしてでしょうか。聖典とは神の啓示を記したものです。黙示録には、ヨハネの時代以降に天の御使いがこの世を訪れるという予言があります。これらの御使いが来て、その訪れとメッセージが記録されると、おのずから新しい聖典が生まれることになります。黙示録の第11章で、ヨハネは、終わりの時にエルサレムで予言するふたりの予言者の使命を予告しています。このふたりの予言者が予言し、神から下された神聖な啓示の言葉が記録に書き留められると、また新しい聖典が生まれることになります。黙示録には数々の出来事が予言されていますが、その中で最も重要なのがイ

払うことを身に付けることによって、信仰を益々強めることができます。ブルース・R・マッコスキー長老は、次のように述べています。「信仰は、個人の義に対する報いとして、神より与えられる賜である。この賜は、義を行なうものに常に与えられる。また、神の律法に従順である度に応じて、信仰の賜も大きくなる。」(Mormon Doctrine「モルモンの教義」p. 264)

ところで、私たちが義しい生活を送り、信仰を強くしようと努める時に、それを快く思わない者がいることを心に留めておくことが大切です。それはサタンです。私たちは自身自身のたくさんのささいな欠点、弱点を思い出しては失望し、持てる力を発揮できないことがよくあります。これはサタンの策略です。私はかつて、教会のある召しを受けた時、自分がふさわしいかどうかについてひどく悩んだことがあります。しかし、任命を受けた時に、祝福を与えて下さった人を通して、自分がふさわしい者と認められているという確信を得ることができたのです。それまで私はそのような懸念をだれにも打ち明けたことがありませんでしたが、啓示を通して確信を抱き、平安と励ましを得て、再び自信を取り戻すことができたのです。

多くの人が時として同じような懸念を抱くのではないのでしょうか。病人に祝福を与えるように頼まれた神権者の場合はどうでしょう。怒りの言葉やふさわしくない思い、怠っていた責任等のことが次々と頭に浮かんできます。このような思いがサタンによるものか自分自身の心の働きによるものかは別として、義しく生活すればするほど、このような事柄に悩まされずにすむようになるものです。また、

天父との個人的な関係を密にすることにより、私たちは自分の罪を率直に告白し、悔い改めの原則に従うことができるようになります。そして、いろいろな欠点はあるにしても、自分の望みを聞き届けて下さるよう、安らかな気持ちで主に願ひ求めることができるのです。

信仰に関する落し穴について、もうひとつ申し上げたいのは、私たちに忍耐が欠けているということです。私たちは病人を癒したり、嵐を静めるといった信仰にまつわる感銘深い話を讀んだり、聞いたりします。その時、なぜ自分にはそのようなことが起こらないのかと考えます。そして、主が私たちの求めにすぐに応じて下さらないと、結局主は何もして下さらないのだときめつけてしまうのです。しかし主は、私たちが忍耐強く待つことを望んでおられるのです。私たちはこのことを是非心に留めておく必要があります(教義と聖約98：2参照)。忍耐は信仰の一部です。

必要な犠牲を払うことを含めて、義しい生活を送ることは、主を信じる強い信仰を得るのに必要不可欠であると言えましょう。それと同時に、忍耐することも必要です。また、私たちがたとえ完全ではなくても自分の罪を克服しようと心から努める時に、主は慈愛を注いで下さいます。私たちはこのことを常に心に留めておく必要があります。

主イエス・キリストを信じる信仰は、福音の第一原則です(信仰箇条第4条)。また私たちは「熱心に最善の賜を求めよ」(教義と聖約46：8)と警告されています。従って、すべての末日聖徒は進んで信仰の賜を求めなくてはなりません。この賜は確かに、主が私たち一人一人に得てほしいと望んでおられるものなのです。

則を挙げています。すなわち、神権者はいかなる働きをする場合にも、堅忍、柔和、温情、偽らざる愛、親切、慈善、清い思いを忘れてはならないというのです。「然る時は、汝の自ら信ずること神の前に強く」と、主は約束しておられます。(教義と聖約121：41—45参照)

私はこれが真実であることを知っています。信仰を働かせる能力は、自らの義しさを信頼する気持ちに大きく左右されるように思います。私は、信仰がなければ完全な生活を送ることができないと考えています。とは言っても、絶えず完全に向かって努力する必要があることは言うまでもありません。戒めを守り、教会に集うことをなごりにしたり、惰性に流されたりしてはなりません。絶えず真心から義しくあろうとする望みを持ち、義に飢え渴く者となる必要があります。そして、「努めて善き業に」(教義と聖約58：27)従うのです。また、単に祈りをとこなえるだけでなく、天父と交通を図るようにしなければなりません。

個人のふさわしさと信仰とは相関関係にあります。ジョセフ・スミスは、そのふさわしさに関連して、特に犠牲の原則について述べています。予言者は、「永遠の生命を得る」にはこの世のすべてのもの、また自分の命さえも犠牲にする程の信仰が必要であると言っています。「人はこの世のあらゆるものを犠牲にして初めて、自分が神の目に非常に喜ばしいことをしているとはっきり知ることができる。」(「信仰講話」6：7)

この世のあらゆるものを犠牲にし、自分の命さえも捧げるといふ言葉には、すべての所有物を教会に差し出す、あるいは真理を守るためには殉教をもうとわなないという響きがあ

ります。時にはこうしたことが必要とされることがありますし、そうでない場合もあるでしょう。しかしいずれの場合も、心から喜んで行なうことが必要です。私たちはこの世のものをすべて犠牲にすることによって天に宝を蓄えることができます。また、王国における主のみ業のために自らの命を捧げることもできるのです。

犠牲を払うという資質は徐々に身に付くものだと思います。これはほかの福音の原則の場合と同じです。私たちの払うその時々犠牲は、命を捧げることに比べたら微々たるものかも知れませんが、それでも私たちはそのような犠牲を払うたびに、主に対する信頼を厚くすることができるのです。

例えば、什分の一を納めることによって、私たちは信仰を強めることができます。什分の一を完納し、断食献金やその他の献金を惜しみなく納める時に、私たちは、主が必ず助けて下さるという信頼をもって、財政その他の問題を主に相談できるのではないのでしょうか。私はこのことが確かであることを知っています。

他の事柄を犠牲にして予言者の勧告通りに1年分の食糧を貯蔵する時、私たちは将来に対する不安を和らげることができるのではないのでしょうか。また、自分の力の及ばないところを助けて下さるよう、主に願い求めることができるとは思いませんか。

ある人が教会の召しを果たすために自分の時間を犠牲にしたとしましょう。その人はほかの責任を果たす時に、さらに強い確信を持って主のみもとへ行こうという気持ちになるのではないのでしょうか。

私たちは自らの内に義の芽を育み、犠牲を

払うことを身に付けることによって、信仰を益々強めることができます。ブルース・R・マッコンキー長老は、次のように述べています。「信仰は、個人の義に対する報いとして、神より与えられる賜である。この賜は、義を行なうものに常に与えられる。また、神の律法に従順である度合に応じて、信仰の賜も大きくなる。」(*Mormon Doctrine* 「モルモンの教義」p. 264)

ところで、私たちが義しい生活を送り、信仰を強くしようと努める時に、それを快く思わない者がいることを心に留めておくことが大切です。それはサタンです。私たちは自分自身のたくさんのささいな欠点、弱点を思い出し、失望し、持てる力を発揮できないことがよくあります。これはサタンの策略です。私はかつて、教会のある召しを受けた時、自分がふさわしいかどうかについてひどく悩んだことがあります。しかし、任命を受けた時に、祝福を与えて下さった人を通して、自分がふさわしい者と認められているという確信を得ることができたのです。それまで私はそのような懸念をだれにも打ち明けたことはありませんでしたが、啓示を通して確信を抱き、平安と励ましを得て、再び自信を取り戻すことができたのです。

多くの人が時として同じような懸念を抱くのではないのでしょうか。病人に祝福を与えるように頼まれた神権者の場合はどうでしょう。怒りの言葉やふさわしくない思い、怠っていた責任等のことが次々と頭に浮かんできます。このような思いがサタンによるものか自分自身の心の働きによるものかは別として、義しく生活すればするほど、このような事柄に悩まされずにすむようになるものです。また、

天父との個人的な関係を密にすることにより、私たちは自分の罪を率直に告白し、悔い改めの原則に従うことができるようになります。そして、いろいろな欠点はあるにしても、自分の望みを聞き届けて下さるよう、安らかな気持ちで主に願い求めることができるのです。

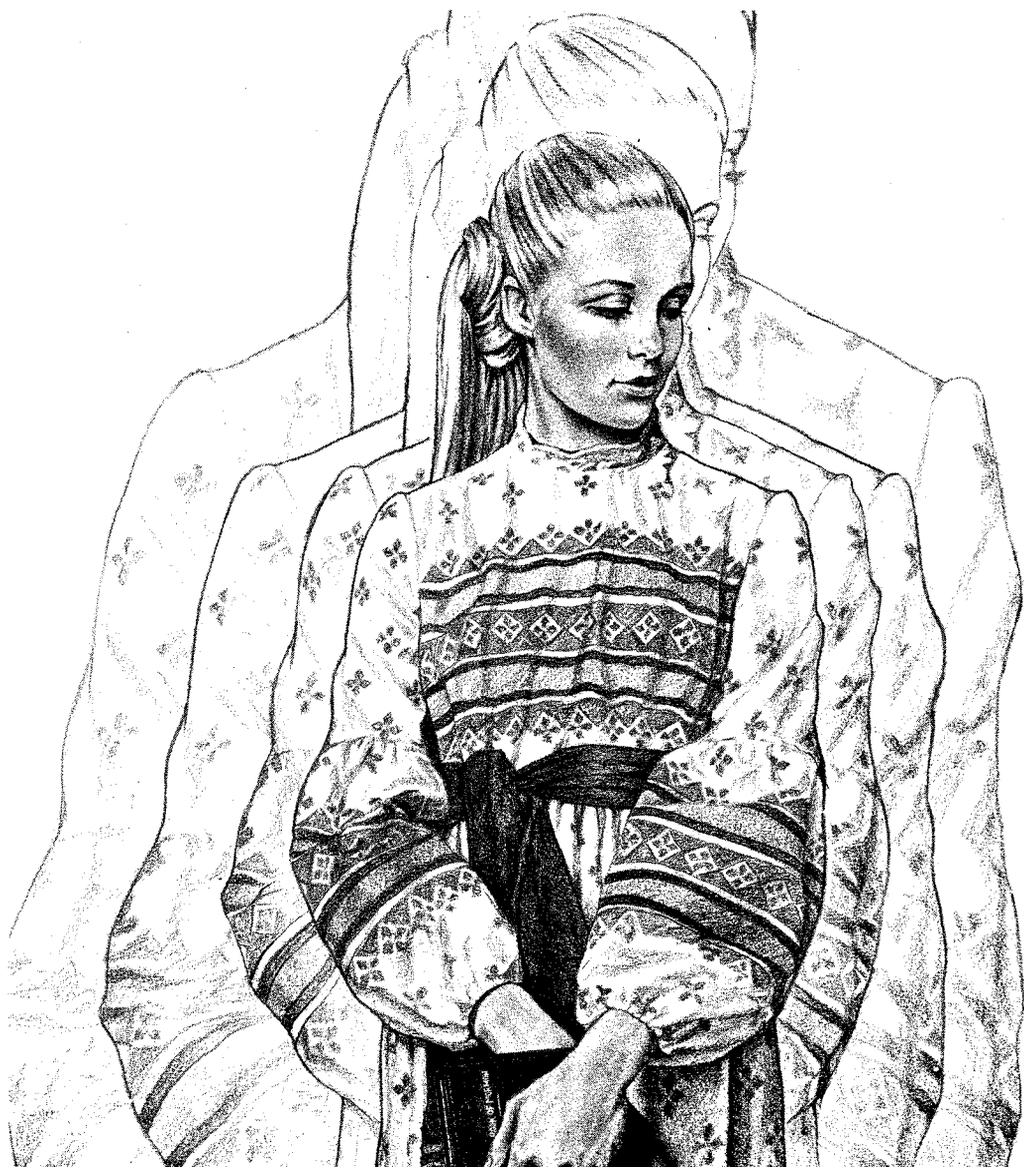
信仰に関する落とし穴について、もうひとつ申し上げたいのは、私たちに忍耐が欠けているということです。私たちは病人を癒したり、嵐を静めるといった信仰にまつわる感銘深い話を読んだり、聞いたりします。その時、なぜ自分にはそのようなことが起こらないのかと考えます。そして、主が私たちの求めにすぐに応じて下さらないと、結局主は何もして下さらないのだときめつけてしまうのです。しかし主は、私たちが忍耐強く待つことを望んでおられるのです。私たちはこのことを是非心に留めておく必要があります(教義と聖約98:2 参照)。忍耐は信仰の一部です。

必要な犠牲を払うことを含めて、義しい生活を送ることは、主を信じる強い信仰を得るのに必要不可欠であると言えましょう。それと同時に、忍耐することも必要です。また、私たちがたとえ完全ではなくても自分の罪を克服しようと心から努める時に、主は慈愛を注いで下さいます。私たちはこのことを常に心に留めておく必要があります。

主イエス・キリストを信じる信仰は、福音の第一原則です(信仰箇条第4条)。また私たちは「熱心に最善の賜を求めよ」(教義と聖約46:8)と警告されています。従って、すべての末日聖徒は進んで信仰の賜を求めなくてはなりません。この賜は確かに、主が私たち一人一人に得てほしいと望んでおられるものなのです。

# 信頼は証の鍵

アネット・パーキンソン



**教** 会員の家庭で生まれ育った私は、改宗者のことを多少ねたましく思ったものでした。それは、改宗者が証をいとも容易に得ているようにみえたからです。私はユタ州で生まれて、信仰篤いモルモンの家庭で育ち、いつも福音を教えられていました。しかし、信仰についていくら聞いても、それがどういうものなのか、またそれを自分の生活にどう生かしたらよいのか、実際にはわかりませんでした。いくら証会に出席しても、自分に証はありませんでしたし、証を得る方法もわかりませんでした。私は祈り、聖典も読みました。行なうようにと一般に言われていることはすべて行ないました。けれども、よく話に聞いている信仰と証が自分でどうしたら得られるのか、わからなかったのです。

大きくなれば自然に証が得られるだろうと考えて、私は長い間そのことを大して心配もしませんでした。ところが、いくら年を取っても証が得られないのです。高校を卒業してブリガム・ヤング大学に入学する頃になっても、まだ証がありませんでした。

私は、同年齢の人々がみんなの前に立って立派な証を述べる証会で、ただじっとすわっていたことを思い出します。自分がまるで霊的な巨人たちの中の小人のように感じられてきました。私より福音の知識が少ないのに、輝くばかりの素晴らしい証を持っている人々が大勢いました。

証を得たいという望みは、年がたつにつれて次第に強くなりました。そしてとうとう、

自分が神と教会を本当に信じているのかどうかははっきりさせなければならぬと思うようになったのです。

私はその問題をじっくりと考えました。するとその時、どうすれば神からの答えが得られるかを述べた聖句が幾つか心に浮かんできました。それらの聖句はいずれも、神から何かをいただくには、まず信仰を働かせなければならないと述べています。私はこのことに気づきました。これについては以前にも聞いていたはずですが、改めてそのことを考えた時に、私は以前とはまるで違った衝撃を受けました。自分には信仰がない、信仰とは何かを理解してさえいないと、その時思ったのです。神とイエス・キリストとジョセフ・スミスについて証を得るには、まず信仰とは一体何かを知らなければなりません。

そこで私は、信仰がどう定義されているかを調べました。その中で一番良いのはヘブル書11章の聖句でした。「さて、信仰とは、望んでいる事がらを確信し、まだ見ていない事実を確認することである。」私はこの聖句を何度も繰り返して読み、長い間それについて考えました。けれどもまださっぱりわからず、意味が判然としないのでした。

うららかな春のある日、澄んだ青空と葉の緑が織りなす陰影を楽しみながらキャンパスを歩いていた時でした。全く突然に、とても大切なことがわかったのです。それまで信仰についていろいろな言葉を読んでも感動したことがなく、信仰とはどんなものであるかを

感じたこともありませんでした。ところが、その時ばかりは違いました。ひとつの言葉が私の心の壁を貫き通し、心の底まで達したようでした。私は「信頼」という言葉によって、本当の信仰の何であるかをかいま見たように感じました。

信仰を得るために、天父を信頼することが大切です。神は私を愛していて必ず真理を啓示して下さる、サタンやだれかにだまされないように守って下さる、と信じるように努めることが大切です。そうする時に、この福音が真実であれば、神はそれを私に教えて下さることでしよう。

けれども、間違わないだろうか。聖霊を通して本当の証を得ないのに、証を得たと錯覚しはしないだろうかという心配が、頭から離れませんでした。ほかのどんなことよりも、それが一番の心配でしたし、一番いやだと思ふことでした。神をそのように信頼することは、宙を飛ぶ自分をだれかが受けとめてくれないだろうかと願うようなこわい気持ちでした。

でも、自分で証を得たいと思うなら、何かをしなければならぬことはわかっていました。

私は、信仰が一朝一夕に得られるものではないことを知りました。しかし、真心から主に信頼し、主に信頼を示そうと努めました。やがて、何か素晴らしいものが心に生じ始めました。ある日、ベッドに腰をおろしていた時、それまで気づかなかったある気持ちを感じたのです。けれども、このような気持ちは以前にも感じたことがあるように思います。

私はそこにすわったまま、心にこうつぶやいたのを覚えています。「主が祈りに答えて下さった。主は確かに生きていらっしゃる。主が生きていらっしゃることが私には本当にわかるわ」と。

それは心の奥底からの暖かい平安な気持ちでした。こうして私は神が生きていらっしゃることを知ったのです。その時はどんなにうれしかったことでしよう。

それが努力の終わりでなかったことはもちろんです。まだ、イエス・キリストが本当に自分の救い主かどうか、ジョセフ・スミスは予言者かどうか、現在の大管長は予言者かどうかについても知らなければなりません。このようにたくさんのことを知らなければなりません。もっと祈り、もっと断食をし、聖典や大会の話や説教をもっと研究しなければなりません。知らず知らずのうちに、アルマ書32章の、信仰を生きた種にたとえたアルマの言葉が私の生活に実現してきました。

私は、主への信頼が必要だと悟った日にその種をまいたのです。種は私の心を広くし、私の理解力を増してくれました。初め種をまくことを恐れた私でしたが、それ以後、福音に対する理解力が100倍にも増して、たくさんの事柄に対して証を得ています。以来私は幾度も頑張って、今も自分自身を強くし、もっとよく神のことを理解しようと努めています。道は決して楽ではありません。しかし、その道を歩むことによって得られる永遠の祝福は、努力を払う十分な価値があるのです。

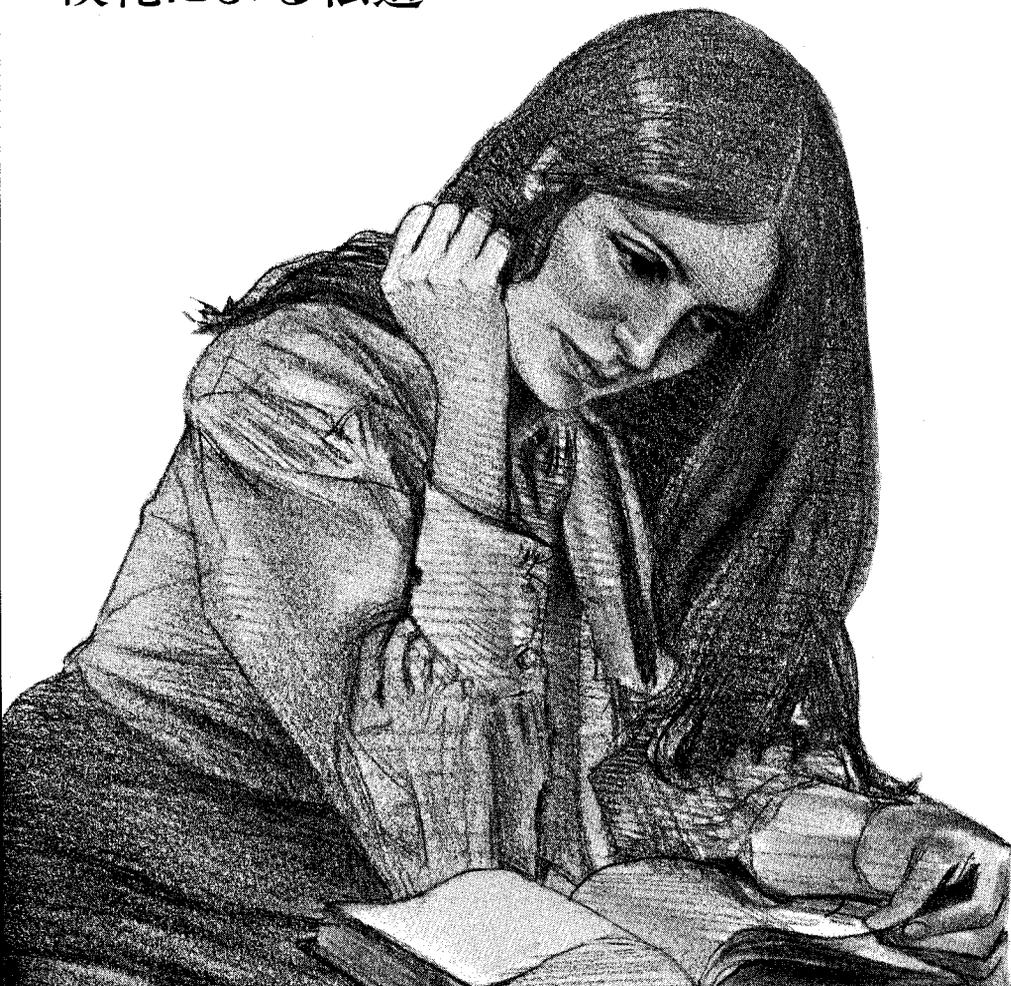
**伝**道に関する最近の記事を読んで、この手紙を書く決心をしました。それと言うのも、この18年間、いつもこのことを考え続けてきたからです。

1953年の夏、16歳の私は、バージニア州アピンドンにあるバーター劇場で、女優を志願して養成を受けていました。劇団の主演を務めていたのは、ニューヨークで開かれた選考会で最優秀賞を得た赤毛の美しい女性でした。恐らく芸名だったのでしょう。名前をジュ

ン・モンカーと言いました。私は彼女と同じ部屋になりました。毎朝私が目を覚ますと、ジュンはいつもベッドに座って本を読んでいた。どんな時間に目を覚ましても、私の目に映る光景はいつも同じでした。このような日々が4ヵ月も続きました。

彼女が「モルモン」であるというニュースは、瞬間に私たちの間に広がりました。道徳というものがとくなくがしろにされる環境の中で、彼女は白雪のように清らかでした。

## 模範による伝道



お酒もタバコも口にしない彼女は、演技の上でもその姿勢をくずしませんでした。もちろん私室に男性を入れるようなことはありません。彼女はすべての人を愛していました。「スター」であるにもかかわらず、とても穏やかで親切でした。彼女は毎朝読書にふけていました。台本ではなく、いつも本を読んでいました。

彼女は自分の信じている宗教について一言も私に話しませんでしたし、私も尋ねませんでした。けれども、彼女は私にとって決して忘れ得ぬ人でした。

何年かたって私は結婚し、2児の母となりました。そしてしばらくすると、私たち夫婦は、自分たちの生活の中に靈性が欠けていることに気づくようになりました。宗教講座を受けたり、いろいろな教会へ行ったりしましたが、それでも私たちの心は満たされませんでした。

そのような折に、私はジューンのことを思い出しました。人の話では、彼女は「モルモン」ということでした。それまで私たちは「モルモン」とは何かまったく知りませんでした。また、歴史の授業で学んだという記憶もありません。そこで私はアラバマ州オペリカにある公立図書館に行き、やっとの思いで捜し出した「モルモン経」を借りました。見ると、「モルモン経」の裏表紙に伝道本部の所在地一覧表が載っていました。そこで私は一番近いジョージア州の伝道本部に手紙を書き、教会では改宗者を受け入れるかどうかを尋ねました。こうして、私たちの家族にとって大切な日々が訪れたのでした。

現在私たち夫婦の親族には、合わせて37人の末日聖徒がいます。また靈界でも、大勢の

親族が同じ機会にあずかっています。ひとりの女性の模範が私の心に決して消えない刻印を押し付けたからでした。このことをその女性にお伝えしたくて八方手を尽くしましたが、捜し出せませんでした。

私たちはどこに人の目があり、その人々が私たちから何を学んでいるか知るすべはありません。しかし、このことをよく心に留めて生活する必要があることを、私は自分の体験から知りました。

オクラホマ州フォス

アン・ファウラー・レーン

編集後記：レーン姉妹の手紙に感動した編集部は、この「尋ね人」探しをしました。その結果、ジューン・モンカー・ウェイト姉妹は現在、カリフォルニア州のハジエンダ・ハイツに家族と共に住んでいます。彼女はそこでカリフォルニア州エルモンテステキー部の扶助協会会長を務めています。彼女は次のように語っています。「私はニューヨークからカリフォルニアに移り、南カリフォルニア大学を卒業した後、プロの世界から引退しました。でもよく、ワード部の演劇やロードショーの指導をさせていただきます。プロの舞台に立った時に、自分の求めていた生き方と、そこでの生活様式には大きな開きがあることに気づいたので。それに、満足のいく達成感を味わうこともできませんでした。けれども、あの短い期間に、ほかの方に良い感化を与えることができたと伺って、本当にうれしく思います。でもおもしろいですね。意識的に伝道しようとするとうるさく成功しないんですから。」

# エリザベス・ フランシス・ イエーツ



「海 陸を問わず、主はいつも主の民の上に見手を差し伸べてこられたとはっきり言うことができます。」1905年3月12日、エリザベス・フランシス・イエーツ姉妹はこう書いている。「決して敵には負けないという信仰が必要とされたことも度々でした。……でも、私は年寄りのひとりとして、『若い頃から年を取った今に至るまで正義が見放されるのをただの一度も見たことがない』と言うことができます。」

彼女は72歳、ソルトレーク・シティで死去するわずか5年前であったが、聖く純粋な彼女の信仰と根気はその年齢のせいではなかった。悲嘆によって試され、苦労によってみがかれ、度重なる試練に耐えてきたその証によって築かれたものであった。

英国デボンシャー州のサウスモルトンで英国国教会の上品な家庭に育ったエリザベスは、十代の時に、バプテスマに関する聖書の教えと自分の教会の教えとが一致していないのに悩み、以来教会に行く楽しみを失ってしまった。彼女は15の年でウイリアム・ウイリアムズと結婚し、長女を出産した後、初めて末日聖徒の話に耳にした。

けれども最初、エリザベスはこの教会に興味を持たなかった。それまでの教会に満足していたわけではなかったが、「少なくとも非常に立派な教会」だと思っていたからである。ある雨の日の午後、彼女は差し出されたパンフレットを断わるのは失礼だと思い、それを受け取って読んだ。そして読み始めると間もなく、ジョン・テイラー長老と数名のフラン

ス人牧師との討論の記事にすっかり心を奪われてしまった。

「私はそれを全部読み終えると、思わず、『主よ、感謝します。とうとう正しい道を見つけました』と叫びました。」彼女は集会に出席して、ジョセフ・スミスの使命について話を聞いた。「心は喜びで満たされましたが、その時は自分の気持ちをあまり表現できませんでした。ただ、自分の罪を悔い改めてバプテスマを受ける以外に道はないと思いました。元の教会の人たちが絶対反対することはわかっていましたし、これまでの友達も冷たくなるだろうと想像はしていました。けれども、実際は予想以上でした。」

この「実際は予想以上でした」という短い言葉の中には、断腸の思いがこめられている。というのは、母親から実家の門をくぐってはならないと言いわたされ、夫からは家族と信仰の二者択一を迫られたのである。彼女は苦悩の涙のうちに自分の証を否定することを拒んだ。すると夫は彼女と4人の幼い娘を残して家を出て行った。エリザベスは毛織物工場に職を見つけ、織機のわきに赤ん坊を寝かせたかごを置いて働きながら、どうにか子供たちを養った。そのような苦労にもめげないエリザベスを見たウィリアムは、4人の娘をみな引き取って、ロンドンに連れて行ってしまった。法の定めにより、エリザベスは彼を引きとめることも、抗議することもできなかったのである。

しかし、エリザベスはひるまなかつた。彼女が最後にためらったのは、1851年12月4日の真夜中に、暗い水面を見つめていざバプテスマを受けようという時だけであった。「とても水に入って行けないように感じました。で

も、『これしかない』と告げる声を聞いたように思いました。」彼女は信仰によってその一步を踏み出した。「それからすべてが変わったと思います。目からうるこが落ちたのです。福音の計画は本当に素晴らしいものでした。私はたとえどんなに雲が厚くても、友人たちが敵になっても、主の助けをいただいて自分は主に仕えますと、天父に約束しました。私は心が弱るといつもそうするように努めてきました。間違いをすることも多く、後悔するような言動も度々ありましたが、この福音が真実であることを疑ったり、他の人につまづきの石を置いたりしたことは決してありません。」

彼女はそれからの6年間、バスという町で宣教師のトーマス・イエーツ家族と同居し、乏しい貯金をはたいて子供たちの行方を捜した。しかし成果はなかった。「何年間も断食と祈りを重ね涙の日々を過ごしましたが、やがて主は私にシオンへ行く道を開いて下さいました。」6年半の伝道から帰ったばかりの息子のトーマスを交えて、イエーツ一家とエリザベスはシオンに向かった。

英国を出発するに当たって、費用がどれだけかかったかはわからない。ただエリザベスはこう記している。「前途に待つ長旅に神様の助けがありますように、途中でぶつぶつ不平を言ったりしませんように、たとえライオンに出会ったとしても文句を言いませんようにと熱心に祈りました。そしてこの祈りはかなえられ、私は不平を言うような事態に一度も陥りませんでした。私の心は始終感謝に満ちていました。」

しかし彼女の息子たちの言葉によれば、信仰深く忍耐強いエリザベスのひとつ忘れていたことがある。それは、航海の間中、死ぬほ

ど苦しい船酔いに悩まされたことである。エリザベスとトーマスは、1863年7月22日の朝、ネブラスカ州フローレンスで結婚し、その午後、西部をめざして旅立った。エリザベスは牛車に自分と自分のトランクの両方の乗る余地がないことを知った時、大切にトランクに詰めた愛蔵の陶器のことを考えて自分は歩いた。苦しい旅ながら彼女の胸は感謝でいっぱいであった。

「初めて聖徒たちの町を見た時多くの人が喜びの涙を流しました」と、エリザベスは書いている。この涙を流した人の中に、エリザベス自身がいたかどうかは書かれていないが、そのひとりであったことは間違いない。

この忍耐強さと感謝の気持ちで、夫婦の愛を一層深いものにした。後に扶助協会中央管理会の第7代会長になった娘のルイーザは、エリザベスが泣いているのを見たのは、猫が棚を落として大切な陶器を割った時だけだと語っている。この時、トーマスは、彼女のために、ZCMI（ソルトレーク・シティにある合衆国で最も古いデパート）にハビランドのセットの輸入を依頼した。当時彼らはユタ州のシビオで生活し、トーマスは監督、エリザベスは扶助協会会長として働いていた。

夫婦の心遣いが細やかであったことは、トーマスが永代移住基金の貸付金返済のため、エコーキャニオンの鉄道工事現場で働いた頃の彼の手紙にうかがえる。エリザベスがトーマスにどのような手紙を書いたかはわからないが、トーマスは愛情を込め、次のような励ましの返事を出している。

「エリザベス、もうひとつ気になることがある。以前に思うほどのことをしてくれないと君から愚痴っぽく言われたせいで私がここ

に来たと考えているようだが、それは全然違う。わかってほしい。君は愚痴のように受けとられることを言ったというが、私には思いあたることがない……。愛するエリザベス、ぼくは小さなわが家と大事な妻とかわいい子供たちを愛している。君という時が最高だ。君のそばにいる時ほど楽しくて幸せなことはない。」

しかし、そのような夫婦の愛も5人の子供の愛情も、エリザベスの心の痛みをいやすことはできなかった。ひとりすすり泣く母親にひとり息子のトーマスがわけを尋ねた。すると、彼女はただこう答えたという。「何年も前にイギリスに置いてきた子供たちのことを考えていたの。」

その子供たちも、母親のことを決して忘れてはいなかった。別れた時に7歳であったスーザンは、11歳の時に家出をし、母親の行方を知りたいと、末日聖徒の家庭に身を寄せた。当時生まれて間もなかった娘はすでに死に、もうひとりの娘はそれから数年後に亡くなった。しかし、1870年頃にひとりの宣教師がスーザンと会い、シビオのイエーツ家に彼女のことを知らせた。こうして、ほんのちょっとしたきっかけで、母と娘はユタで再会したのであった。

スーザンは妹の行方を捜した。ウィリアムは最後の娘だけは母親に会わせまいとして、皮肉にもイギリスからアメリカへ移住してきたのである。こうして、ミシガン州の新聞広告で、スーザンは目ざす妹を捜しあてたのであった。そして4人の娘全員が、トーマスとエリザベスに結び固められた。

エリザベスの言葉が聞こえるようである。「正義が見放されるのをただの一度も見たことがない」と。

# アジア地域事務局の紹介

7月号で紹介しましたアジア地域事務局は、アジア地域（日本、韓国、台湾、香港、フィリピン、タイ、シンガポール、インドネシア）のステークス部および伝道部を実務面で支援する機関です。

この地域事務局の組織は現在、5部門に分かれています。今月号では、その組織と各部門の機能について御紹介します。

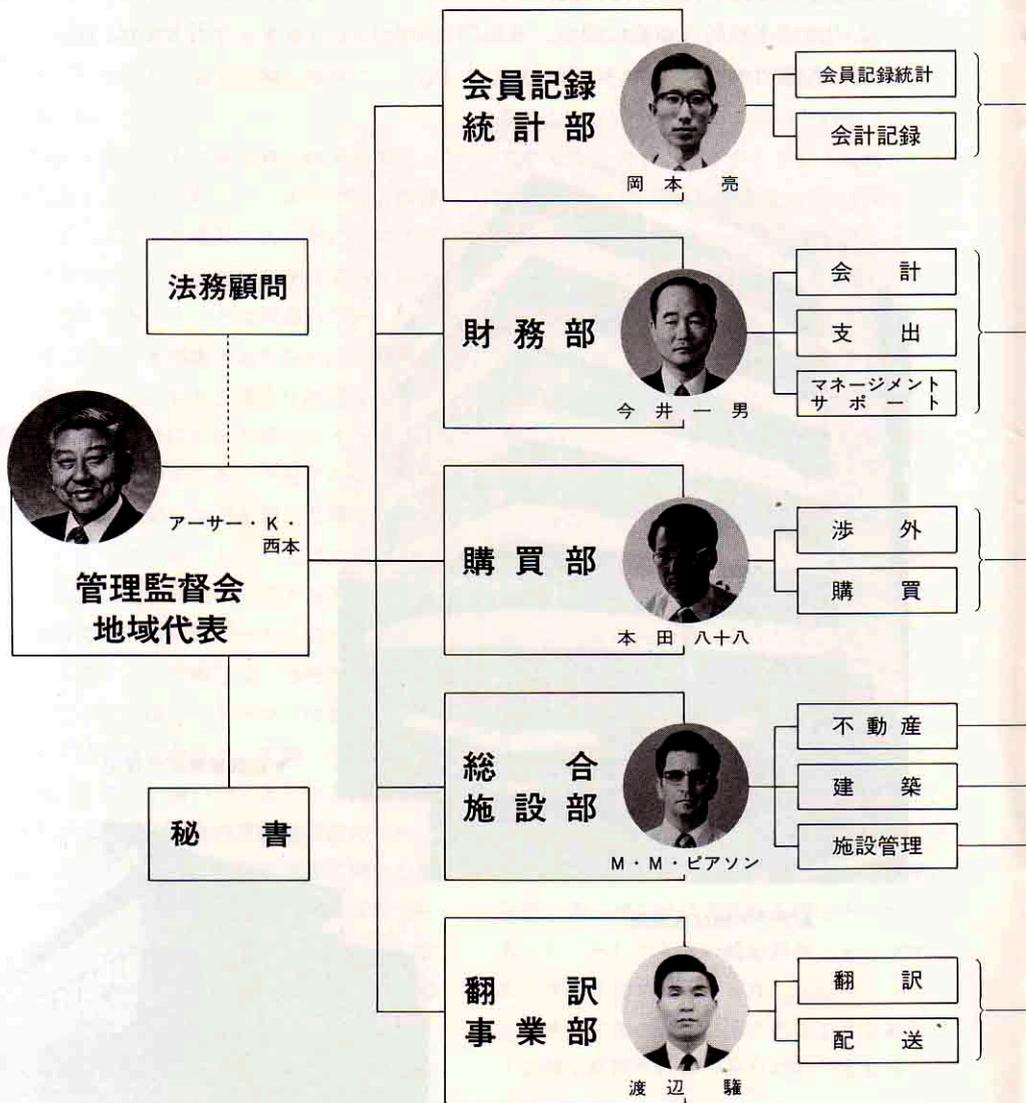


▲アジア地域事務局

▼翻訳事業部の建物



# アジア地域事務局の



# 組織と各部門の機能

教会員の登録状況や、教会諸活動の現況を把握し、各種報告書を作成し、教会運営に必要な資料を提供する。

教会資金を管理し、教会諸事業、諸活動が円滑に推進されるよう、資金の有効な運用活動を行なう。

教会諸事業、諸活動に必要な適切な物品を優良取引先より、低廉な価格にて所要の時期に購入する。

教会諸事業、諸活動に必要な不動産の調査、購入および賃借業務等を担当し、各地の教会運営の能率化を支援する。

教会諸事業、諸活動に必要な建物を、設計、建築し、各地の教会活動が、能率良く運営されるよう建物を供給する。

教会建物、集会所が有効に利用されるよう管理、指導し、必要な修理、維持、保守、保安活動を実施する。

聖典、指導手引き、レッスンテキスト、教会機関誌等の翻訳出版を行ない、福音の学習と、教会の管理運営を支援する。

# 最も偉大な業に 携わっている喜び

日本東京南伝道部部长  
デルバート・H・グローバーク

私が初めて日本の土を踏んだのは、今から18年前のことです。当時は、会員数が今の3分の1程で、今のように新しい立派な礼拝堂やステーク部センター、管理監督会地域事務局の建物はありませんでした。もちろん、神殿の具体的な計画もありません。また、ステーク部はひとつもなく、日本、沖縄、韓国を合わせてひとつの伝道部、すなわち北部極東伝道部が組織されていただけでした。この18年間の、日本における教会の発展は目を見張るばかりです。何という進歩でしょう。かつて私が教会へお連れした人々が、今や福音の中で立派に成長して教会の指導者となり、教会において結婚し、福音の教えの下でそれぞれの家庭を築いているのを見るのは、何と喜ばしいことでしょう。

私はまた、77年前のことを思い出します。私の母の伯父にあたるアルマ・O・テイラーは、日本での伝道を開始するため、最初の4人の宣教師のひとりとして日本にやって来ました。当時の伝道は困難この上ないものでした。教会員はひとりもいませんし、パンフレットもありません。その上、モルモン経はまだ日本語に翻訳されていないという状態でした。L. T. M (言語訓練伝道部) も、もちろんまだ組織されていなかったので、初期の宣

教師たちは日本語が理解できませんでした。これらの障害を乗り越え、初期の宣教師たちは、今日の教会の発展の基を築いたのでした。バプテスマはほとんどありませんでしたが、彼らは門戸を開いたのです。また、私たちに日本語のモルモン経や翻訳された讃美歌やパンフレットを与えてくれました。しかし何にもまして素晴らしいのは、主のみ業が日本の地で進められ、日本人は福音の中で強い民となるという確証を与えてくれたことです。

当時の改宗者は多くはありませんでしたが、彼らが努力したことで奇跡が起こったのだと思います。現在も同じように私たちが努力するならば、毎月、何千人もの人々が教会に導かれることでしょう。そして私たちは、日本に偉大な奇跡を起こす働き的一端を担うことになるのです。

この時代は、主がまさに日本の人々と聖徒たちに、数々の祝福を注ごうとしておられる時代であると確信しています。私は教義と聖約4章が、日本における私たちにもあてはまるものであると信じています。

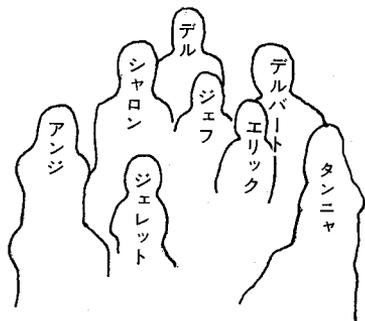
「さて見よ、一つの驚嘆すべき業、まさに人の子らの中(日本)に現われんとす。……そは、見よ畑は早白くして刈り入れを待つが故なり。また見よ、勢力をつくして鎌を入れる

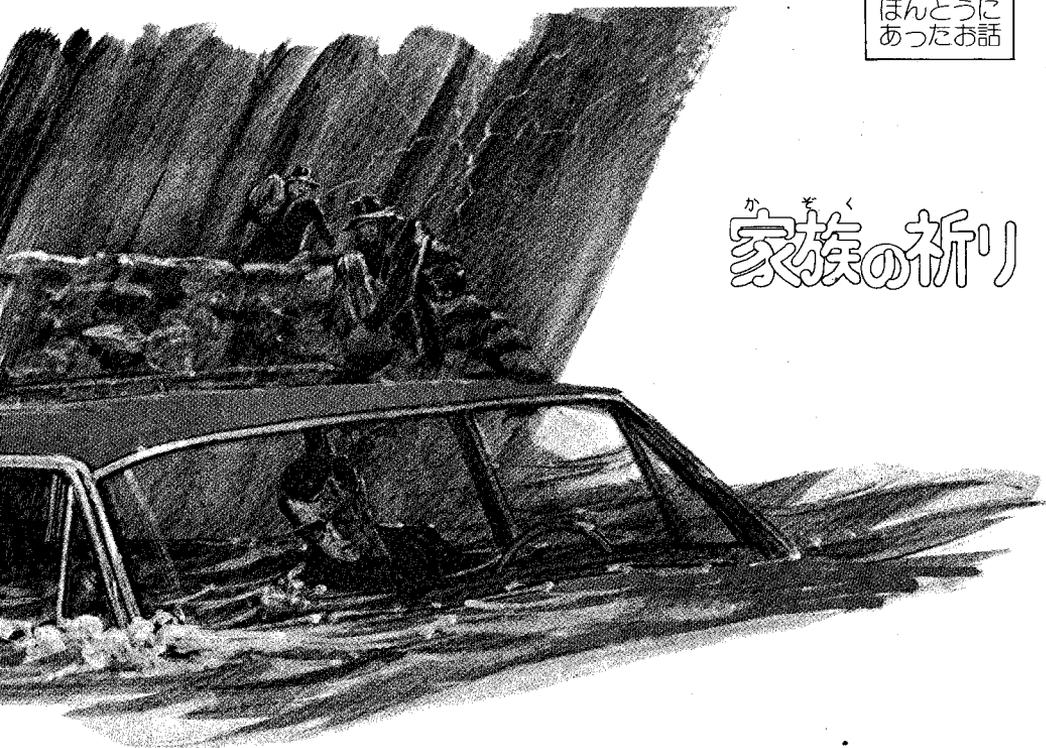
る者は、亡びずしてその身も霊も救いを得るために庫に積み入るるなり。……求めよ、さらば与えられ、叩けよ、さらば開かることを得ん。アーメン。」

私はまた、主が私たちにそれぞれの本分を尽くすよう望んでおられることを信じています。このほかにも、教義と聖約の中には、現在の日本の私たちにあてはまる事柄が幾つか記されています。「見よ、汝いまだ悟らず。汝はひたすらわれに願ひし時はこれを与えらるるならんと思えり。」(教義と聖約9:7)さらに58章には、こうあります。「われ誠に汝らに告ぐ、人は努めて善き業に従い、多くの事をその自由意志によりて為し、多くの正しき事を為し遂げよ。そは人自らの中に自由の意志ありて……」この聖句が、現在日本に住む私たちにあてはまることを私は確信しています。主は、日本に住む私たちに祝福を与えようと準備をしておられます。主はそのような日の来ることを切望しておられます。そして主は、私たちが主の教えに従うのを待っておられるのです。現在の私たちの状態は、主がこの地上に主の教会を回復しようとされた時の状態と似ていると思います。宗教の自由や憲法な

ど、周囲の状態が教会の回復のために整っていても、主はジョセフ・スミスがまず自分でできることをすべてなすまで教会を回復なさいませんでした。彼は正しいことをしたいと願いました。自分の力で真理を探し求めました。いろいろな教派の教義を比較してみました。聖書の中の神のみ言葉を研究しました。聖書に記されている教えに従って、疑問な点を主に尋ね求めました。こうして主は、数年間かけて数々の教えを与え、十分な備えをさせてから、彼を主の教会を回復する器として使われたのです。

私はこの教会が主の教会であることを証します。ジョセフ・スミスが教会を回復する器として選ばれたことを、また私たちは人々を救うという世界で最も偉大な業に携わっていることを証します。主の祝福をいただくにふさわしく、またそのための準備ができるよう、そして私たちがそれぞれの本分を尽くして約束されている奇跡を日本の地に起こすことができるよう、心からお祈りしています。イエス・キリストのみ名により申し上げます。アーメン。





## 家族の祈り

二 これはアメリカのテキサス州エルパ  
ソ。長い間、雨が一滴もふらず、  
かんかん照りの日が続いていました。  
しかし、9月のはじめの月曜日の朝に、  
待ちに待った雨がふりはじめました。  
はじめはぼつぼつというていどでした  
が夕方ちかくに、雨はあらしに変わり、  
暗い空をいなびかりが走りはじめました。  
夕食のしたくをしていた、12さいの  
クリスタと妹は、まどのそばに立って、  
心配そうに外をながめていました。お  
父さんがまだ帰ってこないのです。赤

ちゃんに手術を受けさせるために、遠  
くのヒューストン病院にお母さんをお  
くって行ったのです。

すると間もなく、お父さんはぶじに  
帰ってきました。そのときはもう、夕  
食のしたくは、すっかりできていまし  
た。食べる前に、お父さんは、「いっし  
よにひざまずいて家族のいのりをしよ  
う」と言いました。みんなは、赤ちゃん  
を助けてくださいといのりました。  
それから、お母さんがいない間、お父  
さんと3人の子どもたちが特別の祝福

をいただいて、守られるようにいのり  
しました。

夕食の間も、雨はずっとふっていました。  
そして夕食が終わったとき、電話  
がかかってきました。お父さんは歯医  
者で、その電話はかん者さんからでし  
た。急に歯がいたみだしたので、治り  
ようしてほしいというのです。クリス  
タはお父さんに、いっしょに病院に行  
ってよいかどうか聞きました。それか  
らふたりは、どしゃぶりの雨の中を、  
車にかけこむと、病院に向かいました。

その中数年前のひどい雨のときに、  
大水の出た場所があります。けれども  
ふたりは、そこで砂ぶくろをつみ上げ  
ている人びとのいることに気づきませ  
んでした。

治りようが終わって、ふたりが病院  
を出たときも、まだあらしが続いてい  
ました。お父さんは、高速道路をおり  
たところで、道をまがりました。その  
ときです。反対側の土手の上で、だれ  
かがはげしく警笛を鳴らしました。け  
れども、間に合いませんでした。

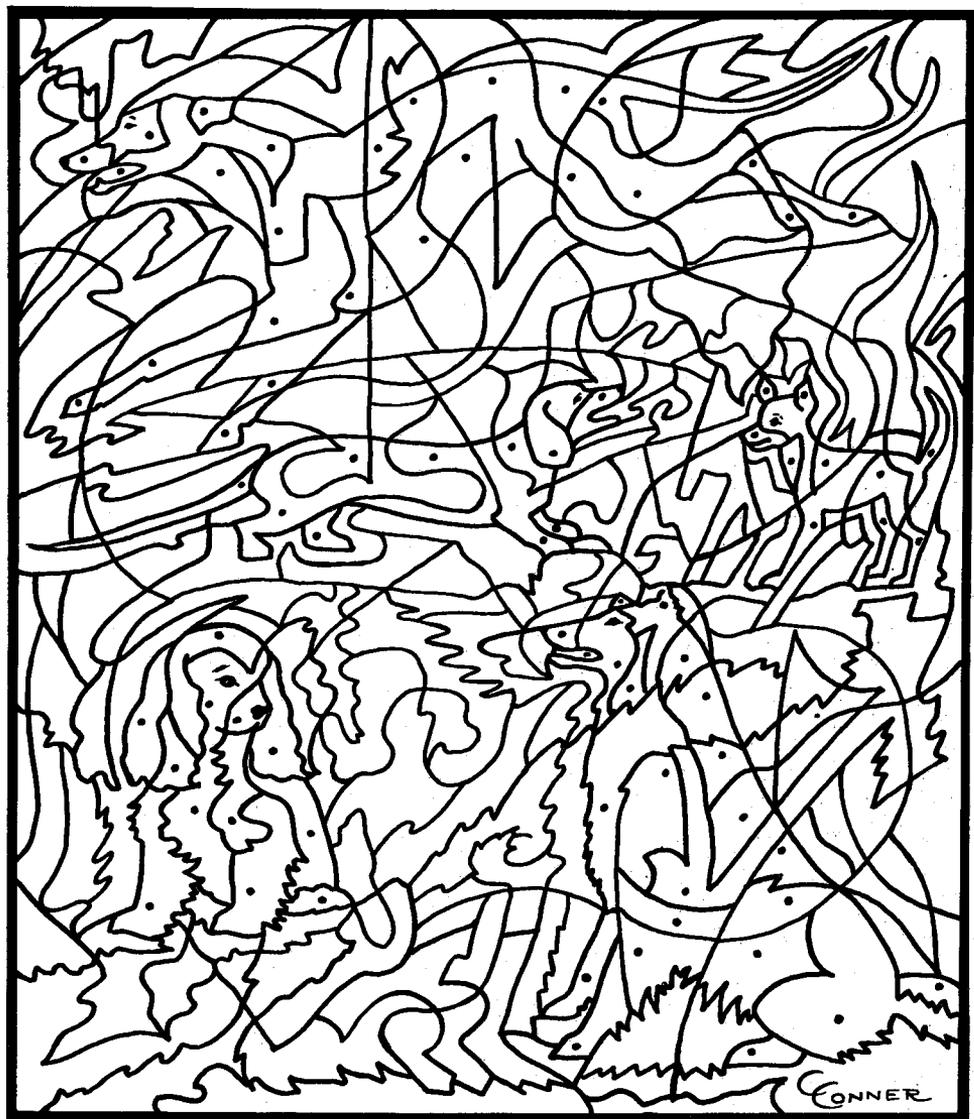
水がドッと車の中に入ってきました。  
そして車は流れはじめました。その  
とき、お父さんは、とっさにクリスタ  
をまどから外におし出しました。する  
と、土手にいたふたりの人が、クリス  
タを土手に引っぱりあげ、安全なとこ  
ろにつれて行ってくれました。けれど

も、お父さんは車からはい出せません  
でした。そうしている間に、車はこう  
水におし流され、お父さんは車からお  
し出されて、下水溝の中にすいこまれ  
てしまいました。「お父さん！お父さ  
ん！」クリスタは大声でさげびました。  
クリスタは、しっかりとつかまえられ  
ていたうでをふりほどいて、流れの中  
にとびこもうとしましたが、クリスタ  
を助けた人びとは、そのうではなし  
ませんでした。

お父さんは、下水溝の中をおし流さ  
れてゆきました。そして、ちょうどそ  
の出口にきたときに、そこにまちかま  
えていた人びとが、急な水の流れの中  
から、お父さんを引きあげました。こ  
のようなおそろしい経験をしたあと、  
クリスタはまた、お父さんに会うこと  
ができました。あちこちけがをしてい  
ましたが、それでも、きせきてきに助  
かったのです。

お父さんはクリスタをしっかりとだ  
きしめました。そして、ふたりは顔を  
見あわせて、にっこりとわらいました。  
「家族のいのりが答えられたんだよ。」  
お父さんは、クリスタの目をじっと見  
つめて言いました。クリスタは、こっ  
くりとうなずきました。

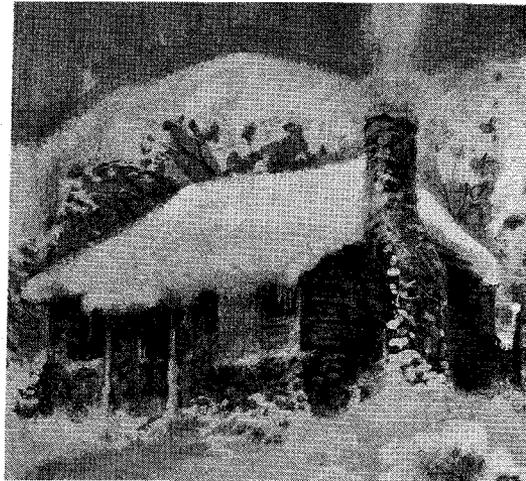
ルシル・C・リーディングの  
体験より



えのなかに、チワワ、プードル、コリー、グ  
レーハウンド、ダックスフントがいます。  
しるしのところをぬりつぶしてみましよう。

# しょうねん 少年ジョセフ

マージェリー・S・キャノン  
ルーレン・G・ウィルキンソン



バーモント州シャロンのおかを雪が  
おい、木もまっ白な雪につつま  
れた、さむい冬の日のことです。

夜もふけて、あたりの家はまっくら  
です。そんな中で、スミス家からは、  
ランプの光がもれています。あと2日  
でクリスマスという、1805年12月23日  
の夜の事です。いったい、なにがあ  
ったのでしょうか。そうです。赤ちゃ  
んがうまれたのです。

つぎの日の朝、きんじょの人がひと  
りやってきました。おとうさんのスミ  
スは、ドアをあけて、その人を、おか  
あさんにだかれてスヤスヤとねむって  
いる赤ちゃんのところへ、あんないし

ました。「おめでとうございます。」ぼ  
うしをとりながらいいました。「ぼうや  
だそうですね。」

「ええ。おとうさんとおなじ名前に  
します。ジョセフってね。」ルーシーは  
いいました。

そのころは、でんわがありませんで  
した。そこで、その人は、村の店でス  
トーブをかこんでいる人びとのところ  
へ行き、「スミス家に男の子がうまれた  
よ」と、みんなにしらせました。

この赤ちゃんはせいちょうし、つよ  
く、げんきな子どもになりました。け  
れども、ジョセフが6さいのとき、ス  
ミス家の子どもたちは、つぎつぎに「は



っしんチフス」というびょう<sup>き</sup>気になりました。そのために、ジョセフの足<sup>あし</sup>にはれものができ、ジョセフは、がまんできないほど、くるしみました。

ある日、きんじょにすむりベカ・パーキンスさんが、おかあさんのところにやってきました。

「ルーシー、はちみつパンをもってきたわ。やきたてよ。」

「ありがとう、リベカ。」

「<sup>すこ</sup>少しでもあなたのたすけになればいいんだけど。」

ジョセフは、ふたりの<sup>はなし</sup>話をききながら、リベカにかんしゃしました。ジョセフのおかあさんは、びょう<sup>き</sup>気の子<sup>こ</sup>ど

もたちのかんびょうで、<sup>よる</sup>夜もあまりねられず、とともつかれていたので、おねえさんのソフロニアは、もう90日間<sup>にちかん</sup>もびょう<sup>き</sup>気で、しんだようになっていました。

「ジョセフは、まだぐあいがわるいんでしょ。」パーキンスさんは、おかあさんにききました。

「ええ、なんしゅうかんもね。『はっしんチフス』のために、かたにはれものができたの。それで、ストーン<sup>せんせい</sup>先生が、それを切りとってくださったんだけど、こんどはそのいたみが、足<sup>あし</sup>にうつったの。先生<sup>せんせい</sup>が、その足<sup>あし</sup>のはれものも切りとって、よくしようとしてくださったんだけど、まだなおらないの。」

すると、おとうさんがこういいました。「なん<sup>にん</sup>人ものいしゃ<sup>み</sup>に見てもらったんです。そして、しんだんのけっかをまっているんです。」

ながい<sup>あいだ</sup>間、まちつづけました。ジョセフには、とてもながくかんじられました。みんな、ジョセフのために、できるだけのことをしました。ハイラムにいさんは、ジョセフの足<sup>あし</sup>のいたみをやわらげるため、ひるも夜も、足<sup>あし</sup>をささえてくれました。それでも、がまんできないほどいたみました。

「おとうさん、がまんできかないよ！」  
ジョセフはさげびました。

するとおとうさんはいいました。「先<sup>せんせい</sup>生<sup>せい</sup>たちがきてくださったよ、ジョセフ。」

ルーシーは、いしゃたちをへやにまねき入れると、たずねました。「先生、どうすればこの子の足はなおるのですか。」

だれもこたえませんでした。すると、いしゃのひとりが、「手のほどこしようがありません。いのちがたすかるためには、足をせつだんしてしまうしかありません。」

ルーシーは、思わずりょう手で口をおさえました。そうしなければ、さけび声をあげたことでしょう。「だめ！ジョセフがかわいそうです！」そのとき、ルーシーは、ソフロニアのことを思いだしました。いしゃから、もうたすからないといわれたときに、家ぞくみんなでいっしょうけんめいにおいのりしました。そして、ソフロニアはたすかったのです。ジョセフのおかあさんは、もういちどそのようなことがおこるように、おいのりしました。

そして、おいのりをおわってかおをあげたルーシーは、しずかにいいました。「ストーン先生。ほかに何かできませんか。足をせつだんするのは、さいごにさせていただきたいんです。」

そこでいしゃたちはあつまってそうだし、はれもののできているところのほねをけずりとることにしました。

いしゃたちが、これからすることをジョセフにせつめいしている間に、ル



ルーシーは足の<sup>あし</sup>の下<sup>した</sup>に、きれいなシーツをしいてやりました。そのころは、いたみをけす「ますいざい」はありませんでした。そこでいしゃは、ルーシーにいいました。「ひもをもってきてください。この子<sup>こ</sup>をベッドにしばりつけましょう。それに、ブランデーか、ぶどうしゅを少しもってきてください。それをのめば、少しはがまんでできるでしょうから。」

けれども、ジョセフは、ブランデーやぶどうしゅをのむのをことわり、ベッドにしばりつけられるのもきらいしました。

「おかあさん、へやを出て。おとうさんがついていてくれるからだいじょうぶ。おかあさんは、ぼくを<sup>なんにち</sup>何日もかんびょうしてくれたから、とてもつかれてるでしょう。おとうさんがベッドにこしかけて、だいていてくれれば、ぼくはがまんしてしゅじゅつをうけるよ。」

すると、いしゃのひとりがいいました。「ぼうやは小さいから、<sup>なに</sup>何かのんだほうがいい。」

ジョセフはおとうさんの手<sup>て</sup>をにぎると、その手をひっぱり、ベッドにすわらせました。「<sup>しゅ</sup>主<sup>が</sup>がたすけてくださるよ。……ぼく、がまんするから。」

おとうさんは、ふというのでジョセフを、しっかりとだきました。

こうして、しゅじゅつがはじまりま

した。とてもいたく、くるしいしゅじゅつでした。ジョセフのさけび<sup>こゑ</sup>声<sup>を</sup>をきいて、おかあさんがへやにかけこんできました。

「おかあさん、<sup>ま</sup>来<sup>ちや</sup>あだめ。出<sup>で</sup>て行<sup>い</sup>って。来<sup>ま</sup>てほしくないの。出<sup>で</sup>て行<sup>い</sup>ってくれたら、がまんするから。」

このようにして、ごんこくなしゅじゅつはおわりました。おかあさんのルーシーは、くちびるをふるわせながら、へやの入口<sup>いりぐち</sup>にじっと立<sup>た</sup>っています。やさしくジョセフのかたをささえていたおとうさんは、おかあさんのほうに、もういっぽうの手<sup>て</sup>をのばしました。

おかあさんは、しずかにへやに入<sup>はい</sup>ってくると、ベッドのそばにひざまずきました。そしてジョセフの、まっさおなかおをのぞきこみました。

ジョセフは、すっかりつかれきっていましたが、おかあさんがじぶんにやさしくふれるのをかんじて、目をあけました。おかあさんのルーシーは、それを見て、ほっとしました。

すると、ストーン<sup>せんせい</sup>先生は、ひたいのあせをふきながら、「これでだいじょうぶ」と、うなずきました。

ジョセフ少年<sup>しょうねん</sup>は、主<sup>しゅ</sup>がたすけてくださったことを知りました。主<sup>しゅ</sup>はおいのりにこたえてくださったのです。こうして、あしはなおりました。

# 福音によって 変わった私

日本横浜ステークス部  
藤沢ワード部付属平塚支部  
(元日本岡山伝道部専任宣教師)  
和田 清 一



「和田兄弟、あなたは、まだ若いのだから、伝道に出る準備をなさったらいかがですか。」  
「いえ、私は伝道に出るつもりはありません。」

私は、バプテスマを受けて間もなく、ホームティーチャーに召されました。同僚は支部長でした。そして、支部長から再三伝道に出る準備をするよう勧められましたが、その頃の私には、伝道に出ようという気などさらさらありませんでした。

宣教師からレッスンを受け、バプテスマを受けた私ですが、伝道の大切さは、全く理解してはいませんでした。というのも、私には小さい時からひとつの夢があったからです。大きくなったら必ず建築家になろうという夢です。そのために自分なりに将来の計画を立てていました。

「伝道は、したいと思っている人だけがすればいい。私には、ほかにしなくてはならないことがある。2年間、伝道に出て、計画を中断するのはいやだ。時間のある人だけが伝道に出ればいいのだ。」私はこのように思っていました。

教会での責任を果たし、証を少しずつ強め

ながらも、伝道に出ようという考えは全く起こりませんでした。伝道に出る人は私と全く「違う人種」とさえ考えていたのです。

それから、2年後の1974年、19歳になり大神権を受けた私は、自分の信仰に対してもっとはっきりしたものを持ちたいと考えるようになりました。折よく多くの会員の助けを受けて、私はハワイ神殿訪問に参加する機会を得ました。独身者の私にとって、神殿を訪問することはとてもむずかしいことでしたが、それを通してとても祝福されました。

神殿内で、大阪ステークスの市道兄弟や地区代表の渡辺長老から、「兄弟は若いのだから日本に帰ったら伝道に出るでしょう」と言われました。それでも心の中で、「伝道になんて出ない」と言い張っていました。一方私は、主イエス・キリストと私の関係、また、私に今最も必要なことは何か考えていました。数日にわたって主の宮居に入り、永遠の真理を学び、儀式を重ねて行く内に、自分自身の中に何か変化が起こりつつあるのを感じました。実際私は、神殿訪問に対して大きな期待を寄せていました。しかし、どのような変化が起こったのかをはっきりと知ることができないまま

でいたのです。

最後の日に、ブリガム・ヤング大学ハワイキャンパスの礼拝堂で証会が開かれました。私もその場で証をしなければならぬと感じました。けれども何を証して良いのか、この訪問で私自身の得た証は何なのか考えてしまいました。しかし、いくら考えても分かりません。その時「出て証をなさい」というみたまの強い励ましを感じ、私は席を立ち、多くの兄弟姉妹の前に立ちました。

その時に、私は答えを得たのです。「神殿に入る機会があったことを心から主に感謝しています。私は、今ふたつのことを心に強く感じています。ひとつは、日本にも同じような主の宮居が早く必要であるということ。もうひとつは、この福音をさらに多くの人々に宣べ伝えなければならないということです。」私は自分の証に驚きました。

「福音を多くの人々に宣べ伝えること。」そうです。「伝道する」という言葉が自分の口から発せられていたからです。

その証を述べてから、私は、伝道について真剣に考えるようになりました。さらに、そこで知り合ったオーストラリア人のデーン・ウィリアムズ兄弟(元札幌伝道部専任宣教師)が、「私は日本で伝道しました。日本が好きだからです」と言うのを聞き、「日本人である私はなおさら自国の人々にこの福音を伝えなければならない」と強く感じたのです。

私は神殿訪問から帰ると、さっそく支部長に、私の得た証を伝えました。私の伝道は、その時から始まったのです。

それから1年半の間、ステーキ部宣教師として働き、専任宣教師の召しを受けられるように準備をしました。特に両親の伝道に対す

る理解と許可を得るように努めました。また地域大会の準備も兼ねて、私は毎週安息日を断食日として過ごしました。両親の許可を得るのがむずかしいことを知っていたからです。しかし、私には確信がありました。「もし、伝道が人の業であれば、私は両親の許可を得られないだろうが、これは神のみ業であるから必ず許可を得ることができる」と。

地域大会に両親を招き、それから父に伝道に出たいことを話しました。父の答えは「二度と口にするな」でした。半年して、再び父に話しました。すると「まだそんなことを言っているのか」と言われました。そして1976年2月、ついに「自分で責任をもって下さい」という父の言葉が返ってきたのです。

伝道に出ることに対して全く関心のなかった私を変え、またむずかしいと思われた両親の許可を得るよう長い間私を勇気づけてくれたのは、主イエス・キリストの福音です。私は2年間の伝道生活を通して、多くの人々が私と同じように真理によって生活を変えられたのを見て来ました。

「人は真理を変えることはできないが、真理は人を変える。」このことが真実であることを私は心から証します。

天父が今私たちに何を望んでおられるかを知る時に、私たちは真理に向かって歩むことができるのです。私は、私を変えた回復された福音を、心から感謝しています。ジョセフ・スミスは主の導きを得てこのイエス・キリストの教会を回復したことをイエス・キリストのみ名により証致します。アーメン。



## 桃ではなくて人をつくる

エズラ・タフト・ベンソン

**だ**れしも逆境の時はある。それによって、  
主が愛する者を鍛えられるためである。  
人を強くするのに助けとなる教訓は、成功の  
絶頂ではなく、逆境の深みにあってこそ得ら  
れるのである。物事が順調に行っている時は

最も危険な時期である。私たちが祝福を感謝  
し、勇気と強さが養われるのは逆境の時代で  
あることが多い。

もう何年も前のことになるが、ある若夫婦  
がアイダホで農業を始めた。資力は乏しかっ

たが、彼らは頭金を払って40エーカーの未墾地を手に入れ、桃を中心とした果樹の栽培を始めた。土地をならし、用水路を掘った後、木を植えて、草取りや水やり等の世話をし、やがて収穫の時期を迎えた。その春は特に花がたくさん咲き、豊かな実りが期待されていた。ところが、見まわりを休んだある晩に霜が下り、一夜にして桃が壊滅状態になってしまったのである。そのために若いジョンは、次の日曜日、その次も、そのまた次の日曜日教会へ行かなかった。そこで監督が様子を見にやってきた。彼は畑にいるジョンを見つけて、「ジョン、何週間も教会をごぶさだが、どうしたんだい？何かあったのかい」と聞いた。ジョンは、「ええ、監督、私はもう教会に行きませんよ。こんなひどいことをなされる神様を礼拝できると思いますか」と言い、事のてんまつを監督に話して聞かせた。当然、監督も彼に同情した。そして畑をちょっと見てからこう言った。「ジョン、霜にやられると上等な桃ができないことは主も知っておられると思うよ。でも、霜がなければ立派な人間ができないことも、主はちゃんと承知していらっしゃると思うんだ。主にとっては、桃ではなくて人間を作ることの方が大切なんだ。」この言葉を聞いたジョンは、次の日曜日に教会へ行行った。やがて翌年の収穫期がめぐってきた。ジョンはのちに教会の監督になった。

また、アイダホ州バンクロフトの近くで大学主催の素晴らしい会に出席した時のことである。私はその会が終わってから、出席していた立派な農場主たちと挨拶を交わした。その中にヨースト兄弟がいた。「ヨースト兄弟、畑はいかがですか。」するとヨースト兄弟は答えた。「はい、上々ですよ、ベンソン兄弟。でも3日間で2万ドルほどの損害を出しました。」私が、「それはそれは、どうしてですか。霜で

も降りたんですか？」と聞くと、彼はこう答えた。「ええ、小麦をやられましてね。どういうことかおわかりでしょう。朝からさっそく草刈り機の出勤です。しかし大丈夫です。倉庫に少しありますから。1年分とは言えないまでもかなり貯えてあります。飢えることはありませんよ。また収穫はあるのだし。」私は彼と別れてから、妻に言った。「本当に立派だね。」

それから子供たちと一緒にローガンに車で出かけ、店で子供のお菓子をかうため、メインストリートに車を止めた。すると、だれであろう、ほかでもないヨースト兄弟と道で会ったのである。「いやあ、またどうしてこちらに」と聞くと、「ベンソン兄弟、きょうは神殿に行く日なんです」という返事である。私は「そうですか。逆境にもめげず、不屈の精神ですね」と言った。するとヨースト兄弟はひとつの教訓を私に与えてくれた。「ベンソン兄弟、不幸に見舞われればなおのこと、神殿が必要なんですよ。」

不幸に見舞われた時には、なお一層教会と福音が必要である。神のみ業に証を持つ男女が、どのような非運に遭っても快活な精神と強い信仰を失わずにいられることは喜ばしいことである。私の知る限り近代国家史上最悪の、世界各国経済を総なめにしたあの第2次世界大戦直後に、私はヨーロッパの教会員を見舞った。ある教会員はかつての幸せな家庭を失っていた。戦争で家を焼かれ、家族を殺されて、たったひとり残されたのであった。その彼らが自分で立って、このみ業の神聖さを証し、永遠の結婚誓約の祝福や、家族が死後も続くこと、死後の世界、ふざわしい人々には幸せな再会があることなどについて神に感謝する姿を見たのである。

確かに、私たちは自分を見舞う逆境に主の

助けと神の祝福をいただいて、必ず耐えることができる。すべての逆境は私たちを強くし、勇気を与え、神により近い者となして、それを益に、また祝福に変えることができるのである。この末日に、大勢の人がその逆境を経験している。

私はよく予言者ジョセフ・スミスのことを考える。私にとって、彼は彼自身が仕え、また代表しているイエスを除いて、この世に生きた予言者の内で最も偉大な予言者である。私はよくジョセフ・スミスの受けた試練と苦難を考える。リバティーの牢獄を2度訪れたが、いずれの時も私はそれを考えた。ジョセフ・スミスがああの不潔な牢獄で下品な男たちに囲まれて、数日どころか何ヵ月間も過ごしたことを御存じであろう。彼はついに耐えきれなくなって次のように叫んだ。

「おお神よ、汝は何所に在したもうや。神の隠家を蔽える大幕何所にありや。

汝の御手はいつまで止まり、汝の眼すなわち汝の聖き眼はいつまで永遠の天より汝の民と汝の僕らの被害を眺め、汝の耳はいつまで彼らのつんざく叫びを聞いたもうや。

誠に主よ、汝の心彼らに和ぎ汝の愛憐の情を受くるまでいつまで彼ら被害と不当なるしいたげとを受くることぞ。……

おお、われらの神よ、汝の苦しめる聖徒を憶えたまえ。さらば汝の僕ら永遠に汝の御名を悦ばん。」(教義と聖約121:1—3、6)

その時、主は予言者に啓示を下し、次のように答えたもうた。

「わが子よ、汝心安かれ。汝の不幸汝の困苦はただこれ東の間なり。

然而して、もし汝よくこれを耐え忍ばば、神は汝を高きに挙げたまわん。かくして、汝あらゆる敵に勝つことを得ん。

汝の友だちは誠に汝を援け、温き心と親し

き手もて再び汝を歡び迎えん。」(教義と聖約121:7—9)

この約束に注目していただきたい。それから、主はさらに穏やかにこう諭しておられる。「汝はまだヨブの如くにあらず。汝の友だちは、ヨブに為したる如く汝に向いて争わず、また汝に罪をも負わせざるなり。」(教義と聖約121:10)

そしてさらに次のような約束を受けた。「而して、現に汝に罪を負わず者たちは、その希望吹き消されその前途の希望溶け去ること昇る旭日の盛なる光に朝霜の溶け去るが如し。」(教義と聖約121:11)

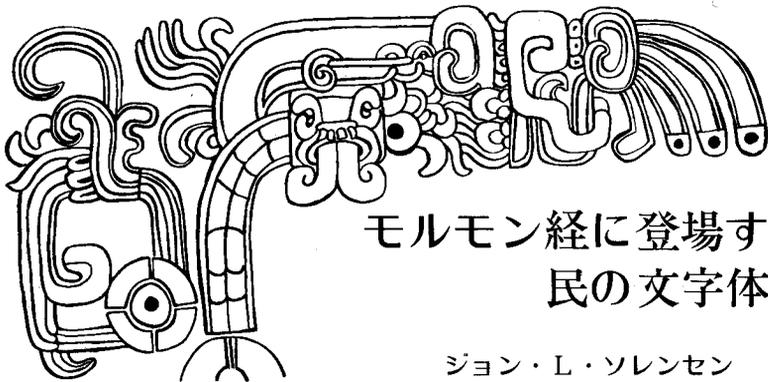
また別の時に、主は予言者ジョセフ・スミスに、「地のいや果にある者すら汝の名を訊ね、愚なる者ども汝を嘲弄し、地獄は汝に向いて怒りを起さん。

然るに心の潔き者、賢き者、貴き者、徳ある者たちは汝の手の下よりいさめと権威と祝福とを常に求めん」(教義と聖約122:1—2)と言われた。

そして、主は次のような意味深い言葉を残された。

「またもし彼ら汝を坑に投げ入れ、または人を殺す者の手に引渡し死刑の宣告決るといへども、またもし汝海の深所に投ぜられ、寄せくる大波汝を呑まんとし、烈風汝の敵となり、諸天黒闇を集め、風雨火石相共に汝の道を塞ぎ、なかんずく地獄のあぎと大口開けて汝を呑まんとすとも、わが子よ汝この事を知れ、すなわちこれ皆汝に善からんため、汝に経験を与えんためのものなり、と。

『人の子』は一切これらのものの下に身を落したり。汝は彼より大いなるか。」(教義と聖約122:7—8)



## モルモン経に登場する 民の文字体系

ジョン・L・ソレンセン

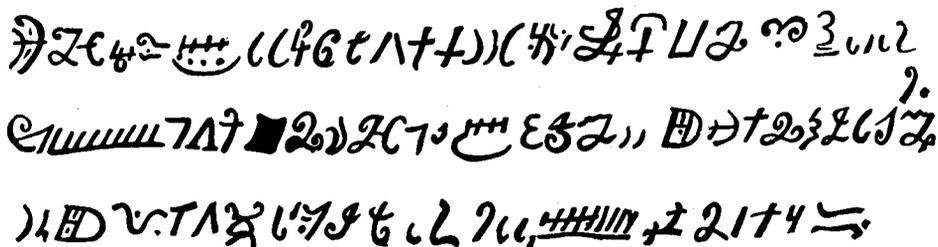
**私** たち末日聖徒は、モルモン経があることから、古代アメリカの文字について幾らかの知識を持っている。さらに私たちはこの知識に、学者がこの同じ分野について調べ出した事実を加えることができる。

メキシコ中部と南部、中央アメリカ北部に、昔西半球で使用されたことがはっきりとしている唯一の純粋な文字体系があった。またこの地域で、これまでに6つ以上の異なっているが相互に関連のある文字体系が発見されている。そして過去何代にもわたって学者たちは古代アメリカの象形文字の解読に取り組んできた。しかし解読できたのはまだ一部に過ぎない。

大部分の古代の文明は表音文字を一切用いず、ひとつの文字で音節や、単語あるいは意味を表わす文字を使った。この体系は表意文字と呼ばれる。表意文字はそれぞれ一語あるいは一概念毎にひとつの独自の記号を持つ体系であって、その数は数百、数千にも及ぶ。中国語やエジプト語の文字体系がこの型である。マヤやその他の新世界の民の文字体系もそうであった。エジプトの象形文字は約750に達し、初期の中央アメリカの文字数とほぼ同じである。

これらの記号のほとんどにはひとつの中心となる概念があった。足跡の記号は「足」を意味した。しかし同時に「行く」あるいは「旅

モルモン経の文字体系は、主に表意文字で、若干の表音文字が併用されている。





あったかを知る唯一の手がかりは、アントン教授に見せた写しである。これはモルモン経の版から転写されたとされる7行の文字で、マーティン・ハリスがアントン教授に見せたものである。この写しがどれくらい正確に書き写されたものかわからないし、また文字の上下もわかっていない。アントン教授は自分の見たものについて後に次のように記述している。

「文字は中国語の書き方に似て縦書きで、不器用なためか、元々そのように書かれていたためか、多少ゆがんだいろいろな種類の文字が書かれていた。そしてその中に半月や星、その他の自然物の様々な線描写が混在していた。文字はメキシコの十二宮の粗雑な絵で終わっていた。」

別の折にも、教授はこの文字が縦書きであることを再び述べ、次のように付け加えている。「最後に大ざっぱに円の線画が描かれていた。その円は幾つかの部分に分割され、いろいろ不思議な記号が半円状に描かれていた。これは明らかにフンボルトによるメキシコの暦から写したものである。しかし、出所のわからないような描き方であった。」(B・H・ロバーツ *Comprehensive History of the*

*Church* 「教会概史」 1: 100—107)

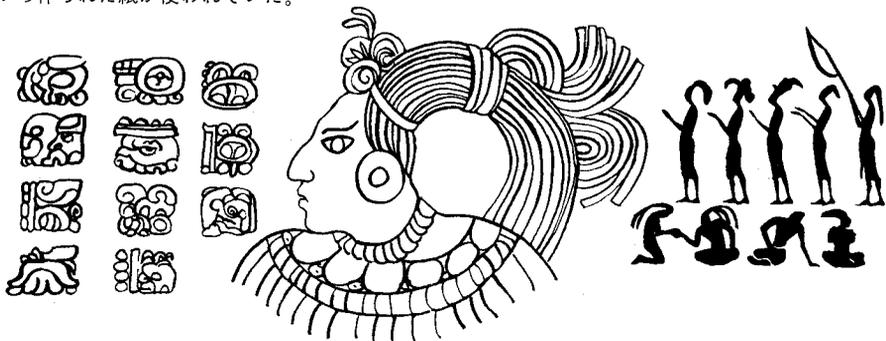
アントン教授が見たものがどんなものであったかを書き残しているのはただ彼ひとりである。そのことから私たちは、モルモン経の版に書かれていたものが古代アメリカの写本によく似ていて、しかも象形文字が縦書きであったと結論せざるを得ない。

ディエゴ・デ・ランダは、スペイン人の征服直後に、ユカタン(メキシコ)の本について次のように述べている。

「これらの民はある種の文字を利用し、彼らの本の中に古代の出来事や科学について書いた。彼らは、絵の中の文字や線画、ある種の記号からそこに記されている事柄を読み取った。また人に理解させ、教えた。私たちは数多くの本にこれらの文字が書かれているのを見た。」(*Relacion de Las Cosas de Yucatan* 「ユカタンの事物の関係」 pp. 27—28)

しかし、ランダや他のスペイン人の司祭は、これらの書物を悪魔の書物と考えた。そこで彼らは土地の人々からできるだけ多くの本を取り上げて、それを焼き捨ててしまった。しかし書物は土地の人々にとってきわめて貴い財産であったので、「彼らはこのことで非常に悲しんだ。」

マヤの本には、いちじくの木の一種の樹皮から作られた紙が使われていた。



これらのマヤの本は、ある種のいちじくの木の皮から作った紙でできていた。この材料で作った長い紙はアコーディオンのように折りたたまれており、その一部または全部を開いて見るができるようになっていた。そして、各「ページ」は、折り目で分けられていた。一方、メキシコ中部では、文書は通常巻き物のように巻いて保存された。

モルモン経には、金属版だけでなく、紙の本についても書かれている。アモナイハの町で墮落した指導者たちは、アルマとアミュレクの説教を信じた男女子供を生きのまま焼き殺したが、それだけでなく、「聖文をのせている記録も取り出してこれを火の中に投げこんで焼きすてた。」(アルマ14:8, 14。また、アルマ63:12で、「刻む」と「書き写す」という両方の言葉が区別されて使われていることに注目していただきたい。)

ロバート・カーマック博士は、グアテマラのキチエ族に伝承されている歴史について書いている。この部族には各血統にそれぞれの本があり、歴史記録係、書記がいた。彼らの本は歴史を叙述し、自分の家柄の源を説明し、統治権を得た次第や周囲の諸民族との関係についても書いていた。また、これらの聖なる書物には、未来についての予言も記されていた。これらの伝承による歴史は何十とあり、すべて口伝された。しかし現在、スペイン人侵入以前の本は3冊しか残っていない。

以上の話はモルモン経に非常によく似ている。ニーファイとその子孫は彼の記録を保存した(歴史と宗教上の事柄と1冊ずつ計2冊……Iニーファイ9:3-4; IIニーファイ4:14)ばかりでなく、彼の父の記録も保存した。統治権があることを証明するためにリーハイ

の記録を必要としたレーマンとレミュエルの子孫は、ニーファイが統治権を奪ったのだと主張した。その結果、彼らはニーファイ人を滅ぼし、ニーファイが所有していた記録をなくしてしまおうとした(アルマ54:16-24; イノス14参照)。ほかに上記の記録とは別のゼニフの民の記録(モーサヤ25:5)、アルマの系統のもの(アルマ63:17)、ヒラマンのもの(ヒラマン16:25)、その他数多くの記録があった。それらすべてをモルモンがひとつにしたものが、今日のモーサヤ書からモロナイ書に至る部分である。

もちろんすべての記録が、紙や金属に書かれたわけではない。文字や絵を刻んだ石の記念碑(「石碑」)もモルモン経の民になじみ深いものであった。オムナイ書20節から22節には、大きな石に自分の民のこと、自分の家系の源、一族の最期について刻んだジェレド人の最後の王コリアントメルについて書かれている。(イテル1:6-32; 10:31から、24枚の金版が民全体ではなく、一つの家系についてだけ書いていることがわかる。)

最近20年間に、学者たちは、マヤの石碑には以前考えられていたように占星術や年代ではなく、「征服や捕囚、王家の婚姻、王家の子孫」(最近マイケル・コウ博士が語った言葉による)のことが書かれているということ明らかにした。コリアントメルが刻んだ石は、ひとつの王家の歴史の典型としてこれにびつたり符号する。

まだまだ古代アメリカの文字については不明な点が多いが、私たちにはずでにこの魅力ある主題についてさらに光明と知識を求めるにあたって必要な基礎知識はあるのである。



## 父は先輩宣教師

エロイーズ・ベル

**土** 曜日の朝は、伝道本部の準備の日です。

近くの支部から宣教師たちが、モルモン経やチラシ、テープその他、今世紀の伝道に必要なもろもろの資料を仕入れに来ます。伝道本部の中は、用事を済ませたり、ニュースを交換したり、仕入れの順番を待ったりする長老たち、姉妹たちで一杯でした。

私は、自分の部屋で、3ヵ月毎に出す報告書のひとつをタイプするのに追われていました。入口のちょうど外に、リチャード・エリクソン長老がすわっていました。一方のひざの上にくすんだ茶色の聖典の合本、もう一方

にレッスンプランを広げて、せっせと赤鉛筆を走らせていました。

偶然の一致か、私が満足感に浸りながら報告書をタイプライターからはずしたのと、エリクソン長老がレッスンプランをパタンと音を立てて閉じたのが、ほとんど同時でした。

「エリクソン長老、長老は伝道を始めてもうすぐ3ヵ月になるわね。伝道はどう？」

エリクソン長老は意味あり気になっこり笑いました。

「いいえ、姉妹、もっと経ちます。」

「わかってるわ。L. T. M. (言語訓練伝道

部)に2ヵ月いたっていうのでしょうか。でも、私」

「違うんです。」彼は私の言葉をさえぎりしました。「そうじゃないんです。私が言いたいのには、L.T.M.に入る2ヵ月前に、私の伝道は始まっていたということなんです。」

エリクソン長老は、ほかの伝道部から移ってきたのだろうか。うわさ話は何でもいつも私の耳に入るけれども、そのような話は聞いたことがない。それとも、ときどきあるように、病気になって一度家に帰り、それからまた伝道地に帰ってきたのだろうか。

「いいわ、わかったわ。でも、珍しいことね。長老は、きっと特別な宣教師として評判になるわ。実際、クリスマスまでには先輩になるっていううわさよ。その2ヵ月間にしたことと伝道とどんな関係があるの？ お話して下さいませんかしら。」

エリクソン長老は、一部始終を次のように語ってくれました。

伝道の召しを受けた日が私の人生で最高の日でした。全米バスケットボールチームに迎え入れられたことも、イーグルスカウトになったことも、問題ではありませんでした。その時、母と妹たちは、2ヵ月の予定でフェニックスにいる祖母のところに出かけていて、家にいたのは父と私のふたりだけでした。私は、母に電話で召しがきたことを伝え終わると、受話器をかけながら歓声を上げました。

「ねえ、お父さん、僕、まだ信じられない。お母さんも素晴らしいことだって思ってくれるよね、きっと。それはそうと、おばあさんの具合少しよくなったって言ってたよ。」私はうれしさを隠し切れずに、ドアの上べりに飛びついて、ドアにぶらさがりました。

すると、父が、「すぐにでも伝道を始めたいのだろうか？」と穏やかな口調で言いました。

「うん。明日からでも始めたい。L.T.M.に入って、それから飛行機で目的地に着くまでなんて、とても待てない。」

「リッチ、そうじゃないんだ。お父さんが言いたいの、今すぐ伝道を始めたいかということなんだ。」

「今すぐ？ だってパパ、手紙には3月20日にソルトレーク・シティの伝道本部に入るようになって書いてあるよ。」

「お父さんが言ったのは、伝道本部に入ることじゃなくて、ここで始めようということなんだ。」

父は大きな椅子にゆったりと腰かけ、じっと私を見つめました。父の目は何か言いた気でした。私は暖炉のそばの足台に腰をおろして、父の言葉を待ちました。

「くどくど言いたくない。リッチには伝道の準備ができているとだけ言えば十分だろう。みんなもそう思っている。やるべきことはみんなやったのだからね。ところで、このことを言ったかどうかかわからないが私はリッチを誇りに思っているよ。」

理由もなく、私は目頭が熱くなるのを覚えました。そして、涙を見られまいと、あわてて靴のひもを結ぶふりをしました。

「しかし、伝道は若者にとってなかなか難しいものだ。伝道に出て最初の頃は、生活を順応させるために、それまで経験しなかったような緊張感や問題を体験することになるからね。まあ、適度の緊張はためになると思う。それによって人は成長するからね。しかし、ときどきあることだが、そうした緊張に耐えられないと、それは伝道の妨げとなる。」

「でもお父さん。お父さんは僕に、準備ができていって言ったでしょう。」

「そうだね。大切なことはみんなね。神権は尊んでいるし、定員会でも一生懸命働いている。セミナーもよくやったし、この1年

はインスティテュートも頑張った。」

「そのほかには？」

「それじゃ、小さなことについて話そう。母さんも私も、個人の責任ということについて随分教えてきたつもりだ。だから、リッチは大人の行動がとれると思う。まあ、たいていの場合はね。」そして、父は笑いながら言いました。「しかし、母さんは少しリッチに甘かったようだ。」

「それはないよ、お父さん。」

「リッチに甘くすることは母さんの特権だと思う。だが、宣教師として知らなければならないことは沢山あるということだけは言っておきたい。しかしもし私と一緒に今からそれに対応する方法を学んでおけば、伝道生活に適應するのも楽だろう。ちょうどいいことに、しばらくの間はリッチと私のふたりだけだ。宣教師の同僚ということでやってみようじゃないか。そうすればわかるよ。」そう言うと、父は深く腰をかけ直しました。

私は、父の言葉がまだよくのみ込めませんでした。「つまり、パパが先輩で、僕が後輩の宣教師になるってということ？ それはいいや。それで、どんなことをするの？ チラシを配るの？ わかった、ビゲロー姉妹やヤング兄弟の家に行くんでしょ。」ダークスーツを着て、父と一緒に近所の家を訪問してまわったら、みんなは驚くに違いない。私は、近所の人々のびっくりした顔を思い浮かべながら、思わず、笑いました。

「いや、チラシは配らない。明日になればわかるよ。さてと、もう休んだ方がよさそうだね。」父は椅子から立ち上がると、身体を伸ばしました。

「先に寝ていいよ、お父さん。僕、ちょっとだけテレビ見てから寝るから。」

「もう時間が遅いよ。さあ長老、ベッドに

入る時間ですよ。」私はこの初めての先輩宣教師の態度にすっかり驚いてしまいました。

「日はとっくに昇ってるよ！」大きな、はっきりとした呼び声が聞こえました。

私はびっくりして、ベッドからはね起きました。いつもの父なら、私の部屋の前を通る時、特に休みの間は、そっと忍び足で通ってくれます。時計を見たら、6時でした。私は笑って、またベッドにもぐり込みました。

すると、入口のドアがバタンと開きました。

「長老、起きる時間ですよ。お祈りが終わったらすぐ身仕度をして。20分以内に台所に来て下さい。」ドアは静かに閉じました。私はあぜんとしてしまいました。

台所に行ってみると、テーブルはきちんとセットされていました。しかし、朝食は何も用意されていません。朝の光が白いレースのカーテンを通してアフリカすみれにこぼれ、父は窓ぎわで、母の揺り椅子にもたれて聖典を読んでいた。

きょんととして立っている私に、父は笑いながら、「長老、きょうの朝食の当番はあなたですよ」と言うのです。そこで、戸棚からコーンフレークを出そうとすると、父はまたも、「それでは宣教師の仕事はできない。一度だけしか言わないから、よく聞いておきなさい」と言って、右手の指を4本立てました。

「4つの基礎食品がある。健康を保つためにそれが必要なんだ。そして、毎食取る必要がある。まず、ミルクか乳製品、次に肉類つまり蛋白質を多く含んでいるもの、果物と野菜、それから穀類。毎食、この4つの基礎食品を忘れないで取ることだ。さあ、さっそく作ってごらん。」

私は肩越しにときどき父の方を見ては、何にしようかと冷蔵庫の中をやたらと物色しながら、静かでのんきな父に何が起こったのだろうか

と考えてしまいました。

冷汗をかきながら身を切られるような思いで、でも泣きごとは言わずに、4つの基礎食品を使った朝食をどうにか7時までに用意することができました。私はちよっぴり得意でした。父はだまって椅子の横にひざまずくと、いつものように主に祈りを捧げました。

食事が終わり、後片づけをふたりで済ませると、父が言いました。「長老、次は勉強の時間です。さあ、ここにすわって。」

「ところで、リッチは午前中スーパーマーケットの仕事があるだろう。でも、午後は暇になる。そこで監督と相談したのだが、監督も私の考えを非常に喜んでくれてね、私たちのホームティーチングの割り当てを変えてくれたんだよ。これが新しく訪問する人たちだ。」

私はリストを手にとって見た。

「お父さん。これ、ワード部の不活発な人たち全員のリストじゃない。」

「いや、全員じゃないよ。でも、忙しくなることは事実だね。そこで、きょうの午後、この人たちのことを考えてほしいんだ。一人一人について考え、また家族について考え、彼らを助けるために何ができるか、どうすれば手を差し伸べられるか、検討してほしいんだよ。特に、今晚訪問するマーリン家族についてね。リッチ、レッスンは君がするんだよ。さてと、私は出かけなくちゃ。5時ちょっと前には帰って来るから、今夜の食事は私が用意しよう。リッチはレッスンの準備をしなきゃならないんだから。」父はそう言って、家を出ました。

私はどうやらマーリン家での最初の集会を混乱させてしまったようです。自分でもへまばかりしたことがわかっています。話でなくてお説教をしてしまったのです。それに、故意にはなかったのですが、マーリン兄弟が

タバコに火をつけた時せき払いをし、また、リンド・マーリンに、学校をやめていたことをすっかり忘れて、学校はどうと聞いてしまいました。

翌朝、父は第2段階に入りました。6時ではなく、5時半に、トレーニングウェアを着て私の部屋に入って来ました。バスケットボールのシーズン以来、私が調子をくずしていると思ったらいいのです。

「宣教師は沢山歩かなくちゃならない。それもリッチが行くところでは特にね。だから、良いコンディションにしておく必要がある。」家の北側にある小さな丘に向かって、私たちはさっそうと走って行きました。「さて…」

さて？ 次は何をしようというのだろうか。太陽もまだ顔を出さないこんな暗い中で、一体何をやるのだろうか。

「兄弟姉妹の皆さん」少し大きな言い回しで、父は始めました。「きょう、私たちは、この支部に新しくリチャード・エリクソン長老をお迎えすることになりました。とてもうれしいことです。では、ここでエリクソン長老から信仰について、短い話を伺いたいと思います。」

「エリクソン長老」は、少し早い息づかいで、目をきょろきょろさせていましたが、信仰について話し始めました。小声でしたが、2分半のとてもよい話でした。森の中での素晴らしい話を終えた後で、先輩のエリクソン長老はこう言いました。「皆さん、明日は、エリクソン長老が信仰についてよく準備した話をして下さることでしょ。」

その夜、後輩のエリクソン長老は疲れていましたが、合本と用語索引、ジョセフ・スミスの「信仰講話」を使って勉強しました。そのために、次の日の朝、自分としてはかなり良い話ができたとと思います。

やがて、私たちは毎朝ジョギング（ゆっくり走る運動）をするようになりました。私は一日置きに4つの基礎食品を使った朝食を作り、その間の日には夕食を用意しました。そして、夜は父と一緒にホームティーチングの担当家族を訪問しました。聖句を暗記することと、朝のジョギングの時に父から割り当てられる話の準備をすることも、夜の日課でした。私はまた、自分の衣類を洗たくし、部屋を掃除し、働いて得たお金の使い道を計画しました。5時半の起床と11時の就寝を守ったからといって時間のことばかり気にしていたわけではありません。私は、宣教師になるために自分を鍛えているのだと、心からそう思っていたのです。だから当然、その時間は私にとって謙遜になる時でした。

「リッチ、今度の日曜日は特別な割り当てだ。」週の半ばに、父はそう言って、私に割り当てを説明してくれました。「実は監督に、オーク・クレスト老人ホームでの聖餐式を我々にさせてほしいとお願いしてあったんだ。それで、今度の日曜日は、ふたりだけで何もかもしなければならぬ。さてと、まず私が司会をして、リッチが開会の祈り、ピアノは私が弾くからリッチは指揮をする。それからふたりで聖餐の祝福をして聖餐を配り、話をする。閉会の祈りは私がしよう。」

老人ホームは、家から車で1時間ほどかかる小さな峡谷にありました。私は、そこへ行くことを思うと、気がふさぎました。施設のような所は、とにかく大嫌いだっただけです。しかし、ただもう男らしく、宣教師のように振る舞うほかありませんでした。

次の日曜日が来て、父と一緒にオーク・クレストに行った私は、問題があることに気づきました。表面的には宣教師の形をし、宣教師らしい素振りをしていても、内面はまだリ

ッチ・エリクソン、陽気な性格のバスケットボールの花形選手のままであったからです。万事にまったく準備ができていませんでした。老人ホームは精潔で近代的で、色調も明るく、ここで働いている人々も元気でした。老人たちを除いては！ かと云って、彼らが別にしわを寄せた暗い顔をしていたわけでも、のろのろと引きずるような歩き方をしていたわけでもありません。また、何もせず、ただじっとすわって、あるいはテレビを見ているように見えたということでもないのです。私は、彼らがみな非常に孤独に見えたことに驚きました。ある部屋には、老人たちを見舞いに来ている友人や家族の姿もちらほらありましたが、このような老人たちは、他の老人とはまったく違った階級の人々のように映りました。しかし、私たちが目にした人々の大部分は、お互いの間でさえ孤立しているように見えました。ここでの地位は、お金でも美しさでも知識でもないのです。自分を訪ねて来てくれる人がいることなのだということを私は知りました。

私たちは、小さなレクリエーションルームで集会を開きました。集会には20人ほどの人たちが、車椅子や折りたたみ椅子を使って集まりました。彼らの傍らの床にはつえが置かれていました。

「親愛なる兄弟姉妹の皆さん」父が司会を始めました。私は父のそばにすわって、集会に集った一人一人の顔を見ていました。すると、父が話すにつれて、老人たちの疲れた顔に微笑が現われ、昔風の眼鏡の奥で目がキラキラと輝き始めました。私は開会の祈りをするためその場に立ちました。しかし、なぜか自分がそれまでしてきた祈り方はこの場にふさわしくないという気がしました。私はしばらくじっと頭を垂れたまま立っていました。それから、静かに天父に祈り始めました。天

父がこの場に集まっている人々を祝福して下さるように、また彼らの霊を高め、元気づけるために必要なものを与えて下さるように、そして天父に再びまみえる時まで力強く耐えることができるようにと祈りました。

私たちはプログラムを進めました。私たちの歌声のあとに老人たちの震える声が続き、それから聖餐の祝福に入りました。老人たちは、震える手でゆっくりと聖餐を受けました。私は、腕を組んで輪になっているように、私たちのまわりをみたまが取り囲み、その力が次第に大きくなっていくのを感じました。その部屋にいて、私たちは孤独ではありませんでした。老人たちもだれひとりとして孤独を感じている人はいませんでした。それは、私にとって驚きでした。彼らの顔は老いてしわが寄っていたかも知れませんが、聖餐を受けたあとの彼らは、とりわけ落ち着いたにこやかな顔つきをしていました。父が話を始めると、彼らは熱心に父の話に耳を傾けました。ワード部でよく見かけるような私語やあくびをする人、せかせかと落ち着かない人はだれもいません。彼らは、父の静かな声にじっと聞き入っていました。それ以上に、父の話す大切な言葉を聞き漏らすまいという感じでした。彼らは、この世の物から得られる慰め以上の慰めを得ていたのです。一瞬私は身が震えるのを感じました。その日、私は、聖霊を実在する大切な御方として感じる事ができたのです。

集会が終わって帰り道、父と私はふたり共黙ったままでした。車窓からふもとの小さな丘の方を眺めていると、よもぎがほこりをかぶって風に吹かれていました。

「ねえお父さん。伝道の目的はこういうことなんでしょ。」私は尋ねました。「時間、運動、4つの基礎食品、聖句を暗記すること、

これはみんな……」私は、自分の言いたいことを話せませんでした。

「それは手段だよ。健康な体、準備された心、福音の計画についての知識、疲れたり緊張した時に自分自身を律すること、これらはみなただの手段にすぎない。だから神権を行使する必要があるんだ。」

「人々を祝福するためには、人々を本当に祝福するためには、彼らの生活に、彼らのすべての、つまり永遠の生活に大きな変化を起こすことなんだね。」

「長老、エリクソン長老！ さあ出かけようよ。昼食のあとでレッスンをすることになってたけど、覚えてるだろう？」伝道本部の玄関の方から、先輩のシャムウェイ長老の声がしました。シャムウェイ長老は、片手に本とチラシを山と抱えたまま、器用にコートを着ました。

「長老、あなたのおっしゃることがわかったわ。本当に早くから伝道してらっしゃたのね。」私は、静かにそう言いました。

エリクソン長老は、首にえり巻きを巻き、コートを着込みながら、次のように答えました。「私は家にいる間に少しでしたが緊張感というものを体験しました。そして、習慣としなければならぬことを身につけました。決まった時間に起きること、正しい食事をする事、聖典の勉強、きちんとした身なりをすること、話をよく準備すること、このような習慣を伝道に出る前に身につけたのです。でも、もっと大切なことは、ほんのわずかでしたが伝道というものをかいま見たことです。ですから、伝道の大切さを少しですが知っています。そのことで父に感謝しています。」そして満足そうに笑うと、「父は私の先輩だったのです」と言って出て行きました。



# 克己

七十人第一定員会会員  
テキサス州サンアントニオ伝道部部长  
ボーン・J・フェザーストーン

**私**は教会の召しの中でもとりわけ光榮な伝道部長という責任に召されて数ヵ月になる。その経験から、「克己」について述べたいと思う。

救い主は言われた。「自分の命を得ている者はそれを失い、わたしのために自分の命を失っている者は、それを得るであろう。」(マタイ10:39) また、アメリカ大陸の民を訪れた

時に、こう言われた。「へりくだりたる心にてわれに来る者たちはその住むべき所天の王国なるが故にさいわいなり。」(IIIニーフアイ12:3) そして、この末の時代にはこう言っておられる。「われ命を下すに人これに従わずば、われ我約束を取消し祝福を与えず。その時、人々心の中に言わん。こは主の御業にあらず、主の約束果されざればなりと。されどかくの

---

伝道の準備をしている若人の皆さんに申し上げたい。容易な伝道からは、最良の経験は得られないということを忘れないでいただきたい。

---

如き人は禍なるかな。その報いは地の下に潜み、天よりの報いあらざればなり。」(教義と聖約58：32—33)

克己は、私の知っている人格者たちに共通のひとつの優れた特性である。それは多くの若者が身につけている特性でもある。数年前にエール大学の水泳チームが世界新記録を数

数樹立した。コーチはそのひげつを聞かれて、「苦しい壁を破れと教えました」と答えた。

私の伝道部に、健康上の大きな問題を抱えた長老がいた。皮膚アレルギーで、気管支と鼻腔が弱かった。私が伝道部に着任した時、彼は体力が落ちて流感にかかってはいけないというので寝ていた。昼食に起きて来るまで

---

人をかきわけて行って、『私が10人の人にバプテスマを施せると、この目を見て約束していただけませんでしょうか』と。

---

2時間も眠っていたという。同僚は不満がつ のって私に電話をかけてきた。

私はその長老がかかっていた医者に電話した。医者はこう言った。「状態は良くないですね。しかし伝道に来たばかりの頃よりは良くなっています。何時間働いても、それで状態

が変わるということはないと思いますよ。」私は当の長老を本部に呼び、いつも心配しているよりはいっそ流感にかかる方が良くはないかと話してみた。黙って忍耐して、主に召された仕事に精を出すことの大切さについて話した後、私はこう言った。「医者は働いても働



かなくても状態は変わらないだろうと言っていますよ。私たちはできるだけのことを今までしてきたし、今もしています。黙って忍耐してはどうですか。」

彼は素直な人で、私の助言を聞き入れ、それを実行してくれた。そして、伝道部きっての立派な宣教師になった。1ヵ月半のうちに先輩宣教師になり、監督長老にまでなったのである。こうして、今ではとても素晴らしい宣教師として働いている。黙って忍耐しながら仕事に励むことの大切さを知った彼は、克己の立派な模範である。

また、もうひとり背骨の悪い宣教師がいた。常時痛んでいたが、彼は私がそれを知らないと思っていた。病気が知れたら解任されはしないかと、伝道したい一心でそのことを黙っていたのである。また、スポーツ競技で両ひざを悪くした長老もいた。前の伝道部長に祝

福をしてもらい、その年いっぱいを持ちこたえることができたが、歩くたびにひざが痛んだ。そこで私が解任の面接をすると、逆にもう2年伝道をさせて下さいと懇願された。

伝道生活は容易ではない。克己、体力、精神力、思慮深さ、自制、靈性、強固で積極的な精神が必要とされる。少年ではなく、大人であることが要求される。伝道はスパルタ式生活であり、快活さと意志の堅固さが求められる。

伝道の準備をしている若人の皆さんに申し上げたい。容易な伝道からは、最良の経験は得られないということを忘れないでいただきたい。そのような伝道では、召しの魅力や、召しを受けた時に教会員から寄せられる関心や賛辞があっても、伝道の報いとはならない。知らない国で働く召しを受けても、それは報いではない。伝道は出さえすれば必ず成長が

保証されるというものではないのである。ガールフレンドや両親が本人の意志に反する伝道を勧めたり、条件を出して伝道に出るよう誘うことは、その長老のためにはならない。

私たちは長老に報いや約束について語る必要はない。そうすることは誠意のない行為である。

克己に励む宣教師には実りが来る。報いは彼が仕える御方からもたらされるのである。そのほかのどんな報いも、ぶどう園の主から受け取る賃金とは比較にならない。

克己には様々なかたちがある。教育や結婚を引き延ばすこと、テレビや映画を楽しむ代わりに聖典や福音のレッスンを勉強すること、自分のことに使うお金を伝道貯金にまわすこと。

放縱は薬物やニコチン、アルコールとまったく同様の悪癖である。ポルノ雑誌を読むこともそうである。それをやめるには強い自制心を働かせ、タバコや酒をやめる時のように禁断症状に打ち勝つことが必要である。賭け事や、テレビの見すぎ、食べすぎ、眠りすぎ、不純な思い、色情、汚ない言葉、下品な話、慎みのない服装、嘘をつくこと、だますこと、これらはみな悪癖である。そうでないと思う人はそれを断ってみてほしい。ひどい苦痛を経験することであろう。それとは逆に、克己の生活は人格、高潔、健康、自制、自信、自尊心を培う。

現代の教会の若人は両極端な社会で暮らしている。世の人々はふたつに分極し、その溝は深い。教会の若人は安易な生活を求めている。若人を伝道に駆り立てるものは、漠然とした魅力や異国で働く召しへのあこがれではない。そうさせるのは隣人への奉仕の生

活であり、もっと靈的になりたいという願い、清い心を追い求める気持ちである。若人に伝道の決意をさせるのは、主のみ業への献身であり、全身全霊を尽くして働きたいという望みである。

私はこの教会へ改宗したひとりの若い女性を知っている。彼女の父親はバプテスト教会の牧師である。私が神殿結婚についてキンボール大管長の勧めておられることをヤングアダルトの若者たちに話した時、そのあとの証会で彼女はこう言った。「私は改宗者です。父はバプテスト教会の牧師です。私がモルモン教会に入った時、父はとても嘆きました。そして今、その父が『道を迷った』娘にかけている唯一の期待は、私の結婚式を自分で司式することです。でも司式どころか、式に参列することもできないと思います。私は父と母を心から愛しています。けれども、私は神殿で結婚しなさいという予言者の言葉に従わなくてはならないのです。」

大勢の人々が宣教師の話聞き、この教会が真実であることを信じている。そして、モルモン経とジョセフ・スミスについて証を述べる。しかし、人生の数々の楽しみを断たなければならないことを知ると、宣教師を断わるのである。

タバコや酒、その他の悪習を断ち切ることのできない人が大勢いる。彼らはその瞬間に永遠に忘れることのないその瞬間に、イエスの足跡に従って、御父の王国でイエスと共同の相続人になる機会をみじんに碎き捨てているのである。

ある土曜日の朝早く、私はギブソン長老とコルネット長老を見送りに空港へ行った。すると、ジャクソン兄弟もギブソン長老を見送

りに来ていた。ギブソン長老が飛行機に乗り込む時間になると、ジャクソン兄弟は目をうるませながら彼と握手をして、「教室から出て行きなさい、もう来なくてよろしいと君に言った日のこと、覚えているかい」と聞いた。ギブソン長老は静かに「はい」と答えた。するとジャクソン兄弟は、「また戻って来てくれて、本当によかったよ」と言った。

また、アルゼンチンのブエノスアイレスで伝道しているモーテンセン長老から次のような手紙をいただいた。

「伝道が終わる半年前に、アルゼンチンのブエノスアイレスの伝道部大会であなたのお話を伺いました。そして、みたまを非常に感じたので、大会のあとでみたまにうながされて、あなたから約束をいただこうと思いました。人をかきわけて行って、『私が10人の人にバプテスマを施せると、この目を見て約束していただけませんでしょうか』と。正確な言葉は覚えていませんが、そのような意味のことをお願いしました。それまでひとりのバプテスマもなく、伝道が間もなく終わろうとしていたのです。するとあなたは私の目を見つめて、確信に満ちた声で、私が精一杯忠実に心と勢力と思いと体力とを尽くして働かならば『10人をバプテスマに導きます』と約束して下さいました。あなたの言葉は偽りではないと思いましたし、自分が求めていた約束を得られたと思いました。

私は心と勢力と思いと体力のすべてを尽くして働きました。そして、精一杯努力して2年間の伝道生活を終わりました。主は私を祝福して下さい、約束は成就しました。2年近くもまったくバプテスマがなかったのに、伝道の最後の土曜日に、同僚と私は水の中に立って

悔い改めた麗しい天父の子供、15人に神の王国の扉を開くことができたのです。」

私が与えた約束は簡単なことで、神権指導者ならばだれにでもできたことであつた。モーテンセン長老は無私の奉仕と克己を体得して、自分の目標を達成したのである。

「指導者は他の人々に期待する以上の厳格な規律を自らに課す必要がある。」(著者不詳)クラレンス・シェアラーはこう言っている。「指導者の真の特性は、全力を注ぐに足る偉大な目的のために進んで犠牲を払う人々に見いだされる。人はただ指導者の地位に就けば指導者になれるというわけではない……。真の指導者になるには、孤独に耐えなければならぬ。……真の指導者になるには疲れを忍ばなければならぬ。指導者にはビジョンが必要である。」

ハーバード大学に、長年学部長を務めて学生から愛された故ルバロン・ラッセル・ブリッグズ氏が、宿題を忘れてきた学生にそのわけを尋ねた逸話が残っている。

学生は、「すみません。体の具合が少し悪かったです。」と答えた。

するとブリッグズ先生は、「スミス君、世の中のおおかたの仕事は体の具合が良くない人々の成し遂げた仕事だということが、いつか君にもわかると思うよ」と言ったと言う。

克己の原則に従って生活する人は、それが幸運の蓄積以上の大きな喜びと満足をもたらすことを知るであろう。

私はこれまでいろいろなことを経験してきたが、克己を実践する時には常に全身に躍動感のみなきるのを感じ、天父に近いという気持ちを感じる。そして心に温かいものがあふれる。私は克己は真実の原則であると思う。

キリスト教美術全集

第1巻 下 部

聖徒の道

